

キリスト教教育と私 (14)¹⁾

塩野和夫

(1)

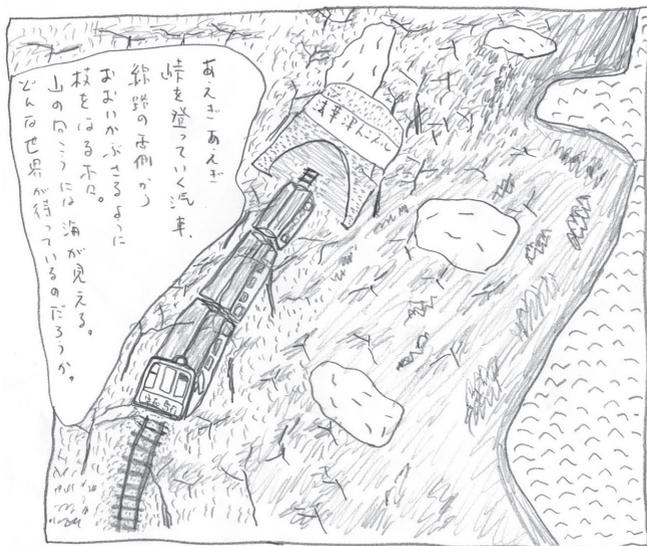
豊中市にあった塩野まりの実家を出発し、2泊3日かけて宇和島に向かったのは1981（昭和56）年4月11日（土）である。

広島駅で下車し、駅前から路面電車で宇品港を目指す。ほとんど起伏のない平坦な街並みは、それだけで印象に残った。宇品港からは高速船で四国松山に向けて瀬戸内海を縦断する。1970年8月、ジェフと九州旅行の帰りにフェリーで別府から大阪まで一晩かけて横断した。あの時は枕だけ借りたぎゅうぎゅう詰めの船内で東北秋田の高校生と話し続けたが、悠々と進む船の揺れは全く感じなかった。それに対して高速船は波しぶきを立てながらエネルギーに進んでいく。いくつかの島の側面を通り海峡を抜け、1時間余りで松山観光港に到着した。そこからはバスに乗って、当時は松山市三番町にあった松山教会を目指す。平山武秀牧師に挨拶するためである。

4月12日（日）朝は奥道後のホテルから松山教会に向かう。前日訪ねていたので、教会の雰囲気にはすぐになじめた。受付に木戸定君が立っている。彼は同志社大学神学部の後輩だった。「前任の鳳教会を辞して、4月から松山教会の伝道師として着任しました」という説明で、教会は一段と近い存在になる。礼拝を終えると平山牧師から起立を求められ、「4月から宇和島信愛教会（以下、「信愛教会」と略記する）に就任される塩野伝道師です」と紹介された。礼拝後は市内の商店街をゆっくりと回り、奥道後のホテルにもう一泊した。

国鉄予讃線松山駅から、4月13日（月）昼前に宇和島へ向けて乗車する。ディーゼル機関車で、宇和島では「汽車」と呼んでいた。サラリーマン風の人たちが松山で次々と下車したので、客室は生活感を漂わせた庶民的な雰囲気となる。松山市の郊外

1) 本稿の執筆にあたって、日本キリスト教団宇和島信愛教会より1981年度から1988年度までの週報を借用した。



宇和島を目指す（1981年4月）

を過ぎてしばらくすると、右手に伊予灘が広がり左手の人家はまばらとなる。伊予長浜からはいくつもの山を越えて行く。驚いたことに勢いよく伸びた木の枝が両側から線路を覆っている。まるで木のトンネルをくぐっているようだ。勾配のきつい上り坂になると、スピードを落とした汽車は喘ぎあえぎ登っていく。

周辺に人家の見当たらない路線を進んでいった時、「この先にどのような世界が待っているのだろうか」と思わず不安がよぎった。

*

2時間余りで宇和島に到着した。改札口で教会役員の村口貢さんが出迎えて下さる。後ろには教会関係者10人余りが並んでおられた。目礼して信愛教会に向かう。ゆっくりと歩いて5分ほどで教会に着いた。会堂に向かって右側にある第1集会室に入ると、西村勝也役員の司会で讃美歌「山路越えて」を歌い、手短かに自己紹介と打ち合わせを行った。

西村勝也 塩野先生は病み上がりですので、無理ができません。まずは信愛教会と伊予吉田教会（以下、「吉田教会」と略記する）の礼拝と教会学校をお願いします。健康を回復されてから祈祷会など始めていただきたいと考えています。

塩野和夫 ご配慮をありがとうございます。

村口 貢 教会総会に必要な2週間の公示はしています。それで、次の日曜日4月19日に総会を行います。なお、こちらでの教会活動には車が不可欠です。そのため新年度の予算には先生の免許取得と中古車購入に必要な費用を組んでいます。

塩野和夫 分かりました。

中尾靖子 越智先生の奥様が始められ、栗原先生も引き継がれた中学生対象の英語教室を開いています。生徒の名簿が牧師室にありますので、連絡を取って来週からでも始められたら良いと思います。

塩野和夫 連絡しておきます。

村口 貢 牧師室には栗原先生の使っておられた和文タイプがあります。これで週報を作っておられましたが、いきなりはむつかしいと思います。慣れていただいて、適当な時期から和文タイプの週報に変更して下さい。

塩野和夫 分かりました。和文タイプの使い方を調べておきます。

西村多見子 信愛教会の教会学校は朝9時から礼拝で始めます。説教は先生を中心に数名の教師で担当しています。次週はイースター礼拝ですので、早速説教をお願いします。

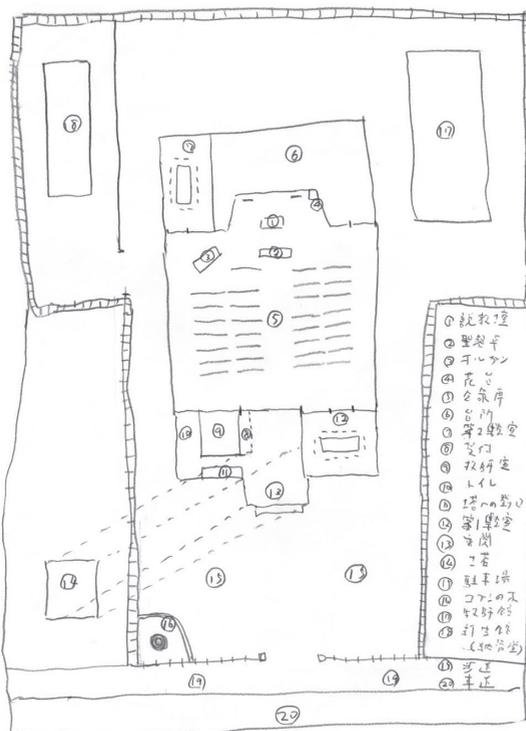
塩野和夫 分かりました。

佐川七生 吉田教会の佐川と赤松です。吉田教会では午後2時から教会学校、3時から礼拝を行なっています。少人数ですが、よろしく願います。

塩野和夫 よろしく願います。

西村勝也 先生は腎臓が悪いと聞いています。市立宇和島病院には腎臓の専門医である万波先生がおられます。妻の西村トク子も市立病院で看護師をしていますので、今週にでも万波先生の診察を受けて下さい。

塩野和夫 分かりました。



記憶による宇和島信愛教会（1980年代）

散会するとすぐに牧師館へ移動して荷物の整理にかかる。大津から運ばれていた荷物が段ボール箱に詰められたまま、牧師館に置かれていたからである。2時間くらい経った時、風呂敷包みを抱えた女性が牧師館を訪ねて来られた。教会員の平井光子さんである。「新任の先生が到着された日にはいつも差し上げています」と言いながら差し出されたのは、赤飯だった。感謝して夕食にいただいた。

*

この週は受難日早天祈祷会（4月17日）を除いて、集会の予定がなかった。それで教会活動全般に関する構想に集中した。

朝は祈りの時である。牧師館の玄関を上がると右側に4畳半の一室があり、この部

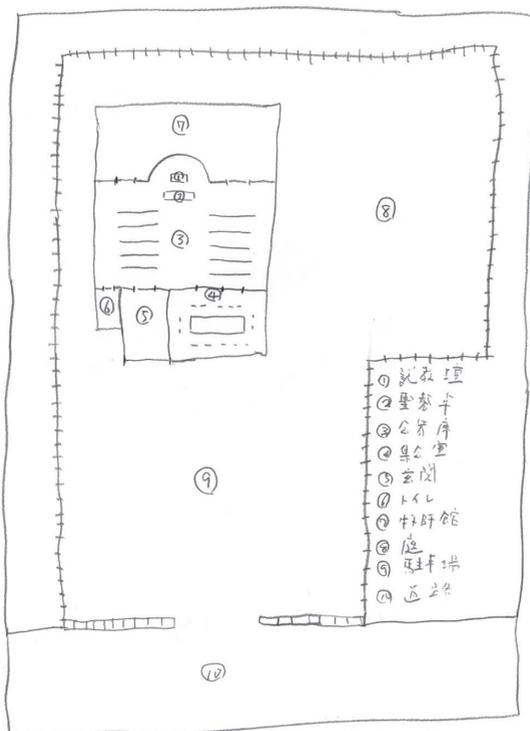
屋を書斎として祈りの時を持った。それから教会前庭の掃除を無心でする。こぶしの木は掃いてもはいても葉を落とした。周辺の様子が分かるようになると、辰野川沿いを上流へ散歩に出かけた²⁾。

朝食を終えると午前中は書斎にこもり、説教と祈祷会の内容に向けて思いを集中した。早々に決定できたのは説教に関する構想である。参考にしたのは加藤常昭牧師の主題講解説教という考え方である。それによると「聖書の一つの書を順々に解き明かしていくので講解説教である。ただし、1回ごとに主題を持たせることにより主題講解説教となる」。この立場に従って、教会歴（イースター・ペンテコステ・クリスマス）や特別な行事の日を除いて、マタイ福音書から主題講解説教に取り組みことにした。それに対して時間的な猶予があったためか、祈祷会における聖書講義の内容はすぐには決められなかった。

午後には教会員宅を目当てに、宇和島の街へ出かけて行った。教会は町の中心からは東の端に位置している。それでも30分歩くと、宇和島中町教会・市立宇和島病院・宇和島東高校・宇和島市役所・国鉄宇和島駅など、市内の主要な場所へ行くことができた。2週間もすると、市内に住む教会員宅の訪問はすべて終えていた。突然の訪問であったにもかかわらず、最長老の毛利キヌさんや都築績さんは「ようこそ、おいでくださいました」と喜んで下さる。牧師室で和文タイプに挑戦してみたが、とても歯が立たない。当面はガリ版の週報で我慢していただくことにして、土曜日の午前中までに原稿を作っておいた。すると会員の山口今さんが土曜日の午後に来て塩野まりと謄写版で刷り、週報ボックスに入れて下さった。吉田教会の週報も必要な部数だけ刷り、日曜日に持参する。英語教室は英数教室に変更されていて、中学2年生の生徒が6名いた。男子2名、女子4名である。はがきで通知し、翌週の火曜日夕方6時から再開した。

4月19日(日)の教会学校は朝8時50分に第1集会室に関係者が集まり、打ち合わせをする。教師には西村多見子・西村由美(幼稚科)、夏秋忠(小学科)、塩野和夫・夏秋従治(中学科)がいて、オルガニストとして塩野まりも参加した。礼拝ははがき大のカードに記されていたヨハネ福音書11章25節から説教し、それから幼稚科(第2集会室)・小学科(礼拝堂)・中学科(第1集会室)と分級に分かれた。教会学校を終

2) 参照、塩野和夫「人の営みが自然に溶け込む町にふさわしいもの」(『日本キリスト教団宇和島信愛教会 創立125周年記念誌』21-25頁)



記憶による伊予吉田教会の会堂 (1980年代)

えると、第1集会室における礼拝前祈祷会に続いて10時15分からイースター礼拝に臨む。マタイ福音書1章23節をテキストにして、「愚俗の信、インマヌエルアーメン」と題して説教をした。

礼拝後の定期教会総会と臨時役員会が終わると、西村勝也さんのスバルに塩野まりと乗り込み吉田教会に向かう。教会に着くと、菊澤敏光さんが数名の小学生と集会室で分級をしていた。吉田教会の教会学校は塩野和夫と菊澤で担当し、必要に応じて塩野まりが助けてくれた。3時からの礼拝と教会総会を終え、宇和島へ帰ると夕方になっていた。

4月26日(日)は信愛教会で合同礼拝を行う。午後2時から野村教会で開かれた南予分区総会に出席するためである。村口役員の車で国道56号線を卯の町まで行き、右折してから29号線をひたすりに東へ走る。1時間余りで到着した野村の町の一角に教会は立っていた。開会礼拝で聖餐式を担当したのは伊予長浜教会の畠澤雄光牧師である。ゆっくりと話しかけるように語られる畠澤牧師の語り口は紛れもない東北弁だった。耳を傾けながら、「南予には東北地方と共通する文化があるのかもしれない」などと勝手な想像をめぐらしていた。総会では伝道部委員に選出される。

四国教区総会が4月28日(火) 昼12時半から翌日にかけて松山番町教会で開催された。やはり村口役員の車で国道56号線を走っていると、次々と南予分区の先生方と合流する。国道沿いには大小様々なレストランやカフェが並んでいた。松山平野に入っすぐのところにあった大きなレストランに立ち寄る。日本式で太い木材をがっしりと組み合わせた合掌造りで屋根の高い建物だった。入ってみると高知分区の方々もいて、中村栄光教会の内田汎先生と隣の席になる。ボリュームたっぷりの定食を注文した私の横で、内田牧師はうどんをすすっている。思わず「それで足りますか」と尋ね

3) 菊澤敏光(1929-1997) 県立宇和聾啞学校における会議中に脳溢血で倒れた1972(昭和47)年10月に、菊澤さんは43歳だった。意識の戻らない日々が1年余り続いていたある寒い日に、「今日は寒いから子どもたちが寄宿舎へ帰ってきたら砂糖湯でも飲ませてやって下さい」と、うわごとのように語った言葉は同僚を深く感動させる。志願して教会学校の教師を引き受けたのは、塩野が就任した1981年4月である。当時、電動の車いすで自宅から教会まで通っていた。その頃の俳句がある。

礼拝や 夏風きって 車椅子

半月や キャンプバーベキュー のぞきおり

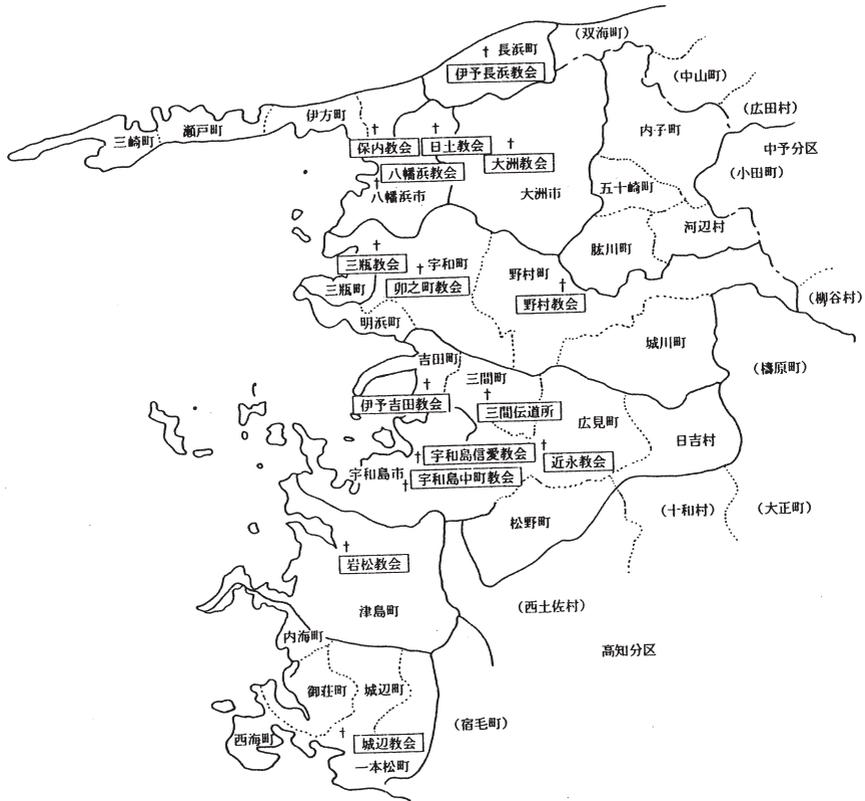
日曜日 教え子待つ日 楽しけり

ところが、本人の努力もあってマヒした体は目に見えて回復していく。隔週で金曜日を吉田教会滞在日と設定した頃には、杖一本で歩かれるまでになっていた。2人で菊澤さんの教え子や「麦の会」(脳卒中者友の会)会員、教会関係者を訪ねた。その際に口癖のように言っていた言葉が、「奇跡という言葉は私のためにある」である。菊澤さんと私で作った「山路会」は、「いつの日か、句碑『山路越えて』の立つ法華津峠まで二人で歩いていこう」という夢を込めた名称だった。障害を負いながらも前向きに望みを見上げて生きた半生であった。菊澤さんは訪問に歩く私を「どた靴」と呼ばれた。彼の人間観がにじみ出ている呼び名に感謝して、私は「どた靴の詩」を作った。

参照、菊澤佳子編『偲び草』平成15年

塩野和夫「菊澤敏光を語る」(『四国教区だより』第47号、12頁)

「どた靴の詩」(塩野和夫『問う私、問われている私』3-5頁)



教会名	創立年	教会名	創立年
大洲	1887	城辺	1932
宇和島中町	1887	野村	1938
八幡浜	1888	近永	1938
宇和島信愛	1888	日土	1946
伊予長浜	1892	保内	1948
伊予吉田	1897	岩松	1949
卯之町	1922	三間	1950
三瓶	1925		

南予分区諸教会の分布図と創立年
『宇和島信愛教会百年史』より

た私に、「昼食は軽い方が昼から動きやすいからね」と軽快に答えられた。なるほど、総会では内田汎牧師の活躍する姿が目立っていた。

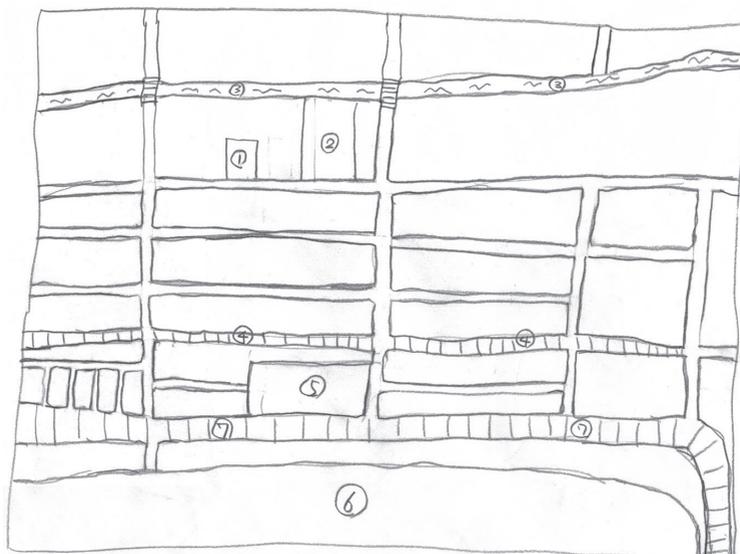
着任当初のあわただしさを過ぎると、大津教会で身に付けた仕事パターンへと収束していった。説教に関しては月曜日に1日かけてマタイ福音書の釈義に没頭した。まずギリシャ語原典と必要に応じてヘブル語原典を調べる。次いで英語の注解書として、New Testament Library のシリーズと Bengel's New Testament Commentary を翻訳し、ノートに書きとめた。日本語では NTD 新約聖書註解やシュラッターの新約聖書註解など、手元にあるすべての本を読んで必要な箇所をノートした。釈義を終えると1週間寝かせておいて、土曜日に説教を書いた。次の通りである。

4月26日	マタイ福音書1章1節	「系図と出会って」
5月3日	マタイ福音書1章2-6節前半	「『破れ』と呼ばれた男」
5月17日	マタイ福音書1章6節後半-11節	「王たちの系図」
5月24日	マタイ福音書1章12-15節	「額に汗した人々」

朝の祈祷会は6月になって始める。原則として信愛教会と吉田教会で隔週に開いた。回数が少ないので、準備に時間を割くことができる。そこで創世記から初めて、聖書の構造と言葉を結び付けて学ぶ方法を考えついた⁴⁾。

火曜日・木曜日・金曜日の午後は地域を定めて訪問に歩く。火曜日は教会の近辺から南側を歩き、本町追手の藤原たつさんや宇和島中町教会の森場政吉牧師を訪ねた。大きなお宅に一人でいることの多かった藤原さんは、お孫さんの話をうれしそうに聞かせて下さった。木曜日には教会の北側を担当地域として、伊吹町の村口さん宅や重谷茂子さんを訪ねた。広島における原爆被害者である重谷さんはいくつもの傷跡が残るふくらはぎを示し、「ここにはまだガラスの破片が残っているのですよ」と教えて下さった。金曜日に歩いた教会西側の地区では英数教室に来ていた清水君（栄町港）、榊形町の山口今さんや平井光子さんを訪ねる。清水君のお父さんは同志社大学の先輩で、仕事中でも奥様と応対に出て下さった。

4) この聖書研究の方法については、以下を参照。塩野和夫『祝福したもう神—創世記に学ぶ—』1-2頁、199-200頁。



- ①宇和島信愛教会 ②浄土真宗 本願寺派浄満寺 ③辰野川 ④商店街
⑤南子文化会館 ⑥城山 ⑦バス通り

宇和島信愛教会周辺図（1980年代）

(2)

四国教区総会副議長 小原敏牧師（新居浜西部教会）を迎えて、5月31日（日）午後2時より信愛教会で塩野和夫伝道師就任式を挙行した。式に先立つ合同礼拝で小原先生は使徒行伝1章12-14節をテキストにして「心を合わせて祈ろう」と題して説教下さり、次のように結ばれた。

神がキリストによる生命を与えてくださったから、
私たちは感謝と喜びと願いを持つことができる。
感謝と願いを強くされる時、教会は強くされる。
心を合わせて祈る事から教会のスタートをきろう。

5月に信愛教会では思いがけないことが起こる。2組も結婚式が続いたのである。

5月1日(金) 茅野 拓幹・成松みどり

5月5日(火) 前田 悟・小西 紀子

結婚式を行うためにはいくつかのプログラムが必要となる。まず結婚式の申し込み受けとキリスト教式で挙式するためのカウンセリングである。それから両家関係者との面談とリハーサルが続く。さらに教会員の協力を得た結婚式を終えると、関係者がお礼のあいさつに来られる。一連の行事を通じて、結婚式を介した地域社会と教会のつながりを育てる可能性を考えさせられた。

吉田教会で思いがけない出来事が起こったのは6月に入ってからである。ある日の礼拝に吉田高校の生徒数名が参加した。それから毎週のように礼拝に出席する高校生がいた。次の7名である。

岡田靖志・加藤俊喜・井上和久・西崎真広 (以上, 3年生)

渡辺啓一・春日屋・戸島出身の女子高生 (以上, 2年生)

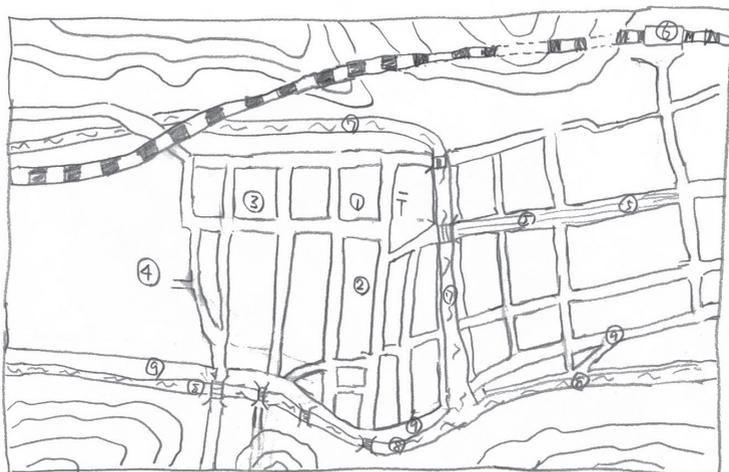
素朴な彼らは礼拝を初めとする教会活動に積極的に参加した。会堂の清掃や庭の草取りを進んでしてくれる。合同の教会学校キャンプが8月7日(金)～8日(土)と吉田教会で行われる。7日夜に盛り上がったキャンプファイアーを初め、総勢30名を越えたキャンプも何かにつけ高校生の助力を得た。

8月16日(日)は信愛教会の礼拝を終えると牧師室に直行した。探し物をするためである。すると教会玄関から清水クニエさんの大きな声が聞こえてきた。

今日の週報、読みにくかった。

私ら年寄りにガリ版の字は読みにくいもんな。

ショックだった。あわただしく過ぎ去る日々の中で、時間を見つけては和文タイプの練習をしていた。ところが多少慣れてくると、かえって週報一枚分の活字を拾う大変さが分かってくる。だからなかなか思い切れないでいた。そこに聞こえてきた清水



- ①伊予吉田教会 ②町役場 ③吉田病院 ④吉田高校 ⑤本町商店街
⑥国鉄吉田駅 ⑦本村川 ⑧立間川 ⑨国道56線

伊予吉田教会周辺図（1980年代）

さんの声に押し出されて、翌週8月23日(日)からは和文タイプで打ち込んだ週報となる。

*

9月6日(日)は吉田教会を会場にして、1981年度の標語「礼拝の充実」をテーマに合同の半日研修会を行った。テキストは加藤常昭『礼拝・諸集会』である。午前の礼拝に続き、午後には夏秋忠「礼拝の充実」、中尾靖子「礼拝の備え」、西村多見子「日常生活とのかかわり」と3人の発題があり、みんなで話し合った。充実した半日だった。

チラシを配り、関係者に声をかけて10月17日(土)・18日(日)に秋の特別集会を開いた。講師として迎えたのは阿部富久世先生(止揚学園保母)である。彼女は止揚学園の現場を踏まえて情熱的に教育を語ったので、会場は熱気に包まれた。中でも心を揺さぶり動かされたのが高校生である。彼らから「止揚学園に行ってみよう!」、「止揚学園の現場を見学したい!」と希望が起こる。そこで話し合いを重ね、希望者12名を代表した高校生が11月1日(日)の役員会で「経過・目的・日程・参加費用」につ

いて報告し、「精神的にも経済的にも支えてほしい」と申し出た。これに対して信愛教会では「今後の計画展開を見守りつつ、適当な時期に募金を呼びかける」とした。吉田教会は「10万円の献金を呼びかける」ことを決定した。

伊吹町にある宇和島自動車学校に通い始めたのは11月17日(火)である。教習に行く日は訪問活動を制限して時間を作り、週に2日か3日通った。学科の担当者は警察署を定年退官した方々で、現役時代の経験を交えて講義された。実習は若手の教官で、ひどく緊張しながら課題をこなしていった。仮免許の試験は12月中旬に合格する。ところがその直後に体調を崩し、腎臓の検査にも悪化が認められた。

時期的に仮免許取得の時と重なったが、体調を崩した主因はストレスに違いない。中学生と高校生による止揚学園の訪問計画に対して、西村勝也役員は「私たちは伊予の国より外へは出たことがない」と言って公然と反対した。主要役員反対により、計画は重苦しい雰囲気の中で進められる。役員の子どもからは辞退者も出た。その頃、牧師館台所の炊事場は暗く、調理に不自由をしていた。そこで「塩野が負担するから」と電気店を営む教会員に申し出て、蛍光灯を付けてもらう。するとこれが役員会で紛糾し、「塩野伝道師が勝手なことをした」とひどく批判された。しかし、彼らの主張が私には全く理解できなかった。冬になると、灯油(宇和島では「油」と呼んでいた)をドラム缶で購入した。ところが、雨ざらしにされていたためドラム缶の上に水がたまり、油の注入口もさびていた。そのため雨水がドラム缶に染み入り、油に水が混じる。教会用も牧師館用も、塩野まりがドラム缶から油をくみ取る作業を担当した。ところが、作業に着手するためにはまず油と水を分別しなければならない。慣れない仕事に彼女はすっかりてこずっていた。何度も担当役員に事情を説明したが、全く考慮されなかった。

*

国際障害者年 記念集会

激しくて厳しくて温かくて美しいもの

●講師 **阿部富久世先生**(止揚学園保母)

止揚学園は、重い知恵遅れの子と“共に、歩む生活を通して、人間の生命の尊さをあざやかに示している学園です。

10月17日 (出夜7時より) 信愛教会
18日 (日昼1時より) 吉田教会

入場無料、お気軽においで下さい

宇和島信愛教会
(中央町ドレメ前)

伊予吉田教会
(吉田町役場前)

「激しく厳しく温かく美しいもの」
(1981年10月)

松山山越教会において12月7日(月)に開催された四国教区臨時教区総会で接手礼を受ける。それによって聖礼典(洗礼式と聖餐式)を執行できる立場となった。すでに11月26日(木)から4名の参加者と5回の予定で開いていた受洗準備講座は、12月に入り真剣さを増していく。

12月12日(土)夜に思いがけない来客を迎えた。高知教会の吉田満穂牧師である。教会の第1集会室で流れるように語られる話をひたすらに伺った。

私の若い日の幸いは良き師、良き先輩、良き友に出会ったことです。師としては小塩力先生がおられる。先生は聖書を読む喜びを教えて下さった。むしろ不器用で、深く掘り下げて考える方でした。福田正俊先生も掘り下げて考える方でした。良き友としては香美教会の山崎先生がいます。彼は福音をはっきりと把握している。

若い日に私は人嫌いだった。牧師になってからも、「毎週、こんな説教をしているくらいなら死んだほうが良かったです」と思った。ところが、テキストからメッセージをくみ取ることができるようになり、事情は一変した。今では「生まれ変わったならば、もう一度牧師をしたい」と願っている。



吉田満穂牧師の来訪 (1981年12月12日)

まず、繰り返し聖書を読む。日本語でも英語でも読む。山崎先生はギリシャ語で読んでいる。それから注解書を見る。聖書から「これ！」というものを捕まえれば、後は何とかなる。説教者として、「聖書にはどこをとっても必ずメッセージはある」と信じるのが大切だと思う。

気が付けば夜の9時を回っていた。多忙なスケジュールの中から時間を工面して訪ねて下さった。ありがたかった。

吉田教会のクリスマス礼拝(12月20日)で西田相子さんが洗礼を受け、佐川弥生さんは信仰告白をした。いずれも中学3年生で、特に西田さんには強い意志を感じる。この礼拝で菊澤敏光さんは三津教会から吉田教会に転入会した。会員が10名となり、教会は大きな喜びに包まれた。

年末に止揚学園から明るい声で「日程の都合で3月の受け入れはできなくなりました」と断りの連絡が入り、途方に暮れる。訪問を楽しみに協議を続けていた中学生と高校生の顔が浮かんだ。一方で、日程的には1982年1月10日の次回役員会までに具体案を作成しなければならない。いろいろと考えた結果、滋賀県下のいくつかの施設に尋ねてみて無理であれば断念することにした。すると、谷本一廣牧師の近江平安教会が宿泊を引き受けて下さった。第2びわこ学園・にっこり共同作業所・出会いの家は、快く研修を引き受けて下さった。そこで、これらの施設を訪ねる計画を「見学と奉仕の研修会」(1982年3月29日より31日まで)としてまとめ、役員会の承認を得た。

*

体調に不安はあったが、1982(昭和57)年1月19日(火)より自動車教習所における研修を再開した。今回は路上における実習が中心となる。教習所を出て設定されていたいくつかのコースを繰り返し運転した。塩野まりの実家から寄付の申し出があった中古カローラは、2月20日(土)に小西正哲の運転で運ばれてくる。だが、その時点ではまだ免許証を取得していなかった。

2月21日(日)の夜に胸部と胃に痛みを感じたので、診察を受ける。その時に主治医の万波医師から告げられた。

来院した時に持参した腎炎の経過を記した書類があった。通常、あれだけ悪いと発症してから10年の生命ですよ。どっち道残り少ない命であれば、面白おかしく過ごせばいいんじゃないですか。

「発症してから10年の生命」という診断の言葉は初めて聞いた。けれども、「残り少ない命であれば、面白おかしく過ごせばいい」という考えにはどうしても賛成できなかった。幸い、3月2日(火)の検査結果に改善がみられたので、散歩と仕事を再開する。その時点で主治医を万波医師から内科の市川医師に変えた。また、「見学と奉仕の研修会」の引率者は塩野まりに変更した。

3月も下旬に入った頃、近永教会の盛谷祐三牧師が訪ねて来られた。

盛谷 今日塩野さんに折り入ったのお願いがあって、来た。

塩野 お願いって何ですか。

盛谷 広見に清家治という人がいる。先日まで農協に勤めていたんだが、「農薬の使用があまりにもひどい」というので辞めた。この人を中心に無農薬有機栽培で野菜を育てているんだが、4月からいよいよ販売を始めたいと希望している。

塩野 もっともな話だと思います。

盛谷 問題は販売網なんだ。いくら無農薬有機農法で育てても、野菜が売れなければどうしようもない。そこで生産者と消費者でグループを作って販売したい。塩野さんには消費者の代表を引き受けてもらえないかと考えている。

塩野 私にできますか？

盛谷 できると思うから、お願いに来ているんだ。

しばらくして清家治さんも来られて、さらに具体的な計画を聞いた。活動に対しては全面的に賛同できた。それで清家さんが生産者代表、塩野が消費者代表となって、4月から希望者に週に2回野菜を届けていただくことにした。併せて年に2回、春と秋に生産者と消費者のふれあい懇談会を行うことにした。春は信愛教会を会場とし、秋は広見の現地においてである。

「見学と奉仕の研修会」は引率者を含めて10名となった。3月29日(月)に宇和島

を發ち、びわこ学園・にっこり共同作業所・出会いの家を訪ねて研修する。参加者は大変な刺激を受けて31日(水)に帰ってきた。4月18日(日)には両教会で報告会を行った。なお、研修会参加者から社会福祉関係の仕事に就く者が出ている。

(3)

前年度の主要行事を踏襲しながらも、1982年度は新しい企画を加えた。これらは信愛教会に活力を与えた。その一つが家庭集会である。「イエスのたとえ」シリーズの第1回家庭集会は藤井文宅で5月17日(月)に開いた。マルコ福音書4章1-9節をテキストにして、「すばらしい収穫のたとえ」を学ぶ。9名の参加者があった。その後、薬師神政子さん・山口今さん・平井光子さん・早見都さんも家庭を提供して下さる。

2回目	ルカ福音書15章1-7節	「羊飼いのたとえ」	12名
3回目	ルカ福音書15章11-24節	「本心に立ち帰る」	9名
4回目	ルカ福音書15章25-32節	「兄の怒り」	7名
5回目	ルカ福音書11章5-8節	「祈りの原則」	8名

安定した活動を展開する信愛教会には転入会者が加えられた。

山本登美子	4月25日に別帳会員より現住陪餐会員に復帰する。
藤井 三男	5月2日に中村栄光教会より転入会する。
藤井 文	5月2日に中村栄光教会より転入会する。
西山 晴子	7月25日に土佐福音教会より転入会する。

まごころ野菜の第1回ふれあい懇談会が5月に信愛教会を会場として開かれた。20名余りの参加者の多くは見かけない方だった。塩野の司会により清家治さんがほそほそとした口調ながら、堆肥の作り方・野菜の育て方・害虫の駆除について熱心に話される。ほとんど初めて聞く話だった。質疑に入ると、次々と手が上がる。種子保存の方法・野菜の安全性・配達が重なる野菜の調理についてなど、いずれも食生活への熱意を感じさせる質問だった。気が付くと予定の時間となる。新しい風が教会に吹き込まれるようなひと時だった。

5月21日(金)に運転免許証を受け取った。早速、吉田教会の礼拝と祈祷会をはじめとした諸集会にはカロラを運転して出かける。帰りの時間に束縛されなくなったので、集会後はほぼ毎回会員宅を訪ねる。どのお宅でも歓迎された。

1982年度の標語「祈りの生活」をテーマとして6月20日(日)に長崎塊牧師(前松原教会)を招く。

朝礼拝 朝10時15分 信愛教会 「はじめに祈りがあった」(使徒行伝9章1-12節)
講演 昼1時 信愛教会 「とりなしの祈り」
夕礼拝 夜7時 吉田教会 「何を与えようか、求めよ」(列王記前3章5-15節)

3回の集会で長崎牧師は自らの体験を交えながら祈りの生活を説き明かして下さった。講演の冒頭は次の通りである。

祈りは信仰生活の付け足しではなく、中心である。祈りは御言と密接な関わりを持ちながら、教会の中心を占めている。そこで、御言だけでなく祈りだけでもなく、両方を大切にせねばならない。

訪問活動を継続していると、少しずつ訪ねる相手が増えていった。宇和島では山下フサさん(会員である山下マサ子さんのおばさん)、家庭集会に出席を始めていた中村菊恵さん、現住会員に復帰した山本登美子さんが対象に加わる。この春に米寿を迎えられた山下フサさんは、明治・大正期宇和島の暮らしを具体的に話ただけでなく、当時の食事を用意下さった。教員だったご主人を亡くされたばかりの中村さんは、彼の病床生活について聞かせて下さった。

吉田ではかつて熱心に教会に来ていた毛利宇一さん・延永久文さん・三瀬幸子さんを訪ねる。訪問すると毛利さんは必ずコーヒーを入れ、若い頃に取り組んでいた仕事について話された。吉田町の道路工事を引き受けていた土建業者の延永さんとは仕事の話になる。その頃、吉田町に自宅を建てた方がいた。榎本喜一・千代子夫妻である。吉田教会の礼拝に出席されたので、新築のお宅を訪ねる。彼らは11月21日(日)に松山番町教会から吉田教会に転入会した。

この年の夏もキャンプが続く。岩松・信愛・吉田3教会合同の夏期キャンプを8月3日(火) - 4日(水)に岩松教会で行う。大きな会堂で子どもたちははしゃいでいた。かつて岩松で養護教育に打ち込んでいた菊澤さんは、時間を作って当時の仲間や生徒を訪ねておられた。吉田教会「夏の子供会」を8月10日夜に行う。由良半島後で10日(火)から12日(木)に行われた南予分区中高校の夏期キャンプに、西田相子さん・佐川弥生さんと参加する。海と山が生み出す豊かな自然の中で、彼女たちは他教会の中高生と交流していた。さらに同信伝道会(以下「同信会」と表記する)が開催した献身キャンプ(8月17日-20日、滋賀県能登川)に、吉田教会から3名の高校生を派遣した。

夏の行事が一段落した8月22日(日)の夕方に発熱し、23日24日と血尿が続いた。疲れが腎臓に出たのである。その週から夏期休暇(8月27日-9月3日)に入ったので、大阪の実家に帰り静養する。

半日研修会(9月5日、テーマ「祈りの生活」)に続いて、虻江紀雄先生(被爆老人ホーム 清鈴園園長)を招いて秋の特別集会を行った。全体テーマは「老人問題を考える - 老人ホームの現場から -」である。信愛教会(10月30日〔土〕午後7時から9時)と吉田教会(31日〔日〕午後2時から4時)で集会を開いた。老人ホームの見方について、虻江先生の「設備ではなく、老人の表情で判断できる」という考えが印象に残る。彼の主張は「老人の表情は日常的に人々との交流があるかないかを示していて」、「設備より人間的な交流が大切だ」という立場に基づいていた。

11月にはまごころ共同野菜のふれあい懇談会を生産者現地の広見で開いた。宇和島から320号線を東へ進み、近永で280号線に入る。そこからは広見川に沿って北へ10キロメートル走ると広見で、右折して川を渡ると清家治さんのお宅がある。広い庭で待機していた生産者10数名と合流し、いくつかのグループに分かれて早速農作業に従事した。畑に降りると、たくさんの紋白蝶が有機肥料の畑の上だけを舞っている。不思議な光景だった。畑の土は柔らかくて黒い。清家さんは常々「農業は土作りから始まります」と言っていたが、「これがその土なのだ」と思う。ところが手が回らないためか、担当した里芋畑は草ぼうぼうだった。それでも土が柔らかいため、簡単に草は抜ける。1時間余りも仕事をすると、見違えるように整然とした畑になった。農作業が終わると、生産者手作りの料理をご馳走になる。

吉田教会から希望の出ていた家庭集会を12月になってようやく実施できた。月に1回「イエスのたとえ」を学ぶ。

- 第1回 12月10日(金) 佐川宅
マルコ福音書4章1-9節 「労苦する農夫のたとえ話」
- 第2回 1月7日(金) 村上宅
マタイ福音書13章24-30節 「良い種と毒麦のたとえ話」
- 第3回 2月11日(金) 榎本宅
ルカ福音書15章1-7節 「失われた羊のたとえ話」
- 第4回 3月11日(金) 佐川宅
ルカ福音書15章11-32節 「待っていた父のたとえ話」
- 第5回 4月8日(金) 三瀬宅
ルカ福音書11章5-8節 「不親切な友人のたとえ話」

*

1983年度定期教会総会(4月3日)で、信愛教会は創立百周年委員会の発足を決議する。この時点での委員会発足は創立95周年(1983年12月)への備えという意味合いが大きかった。毎月一度開いた委員会では信愛教会の歴史を学ぶ。なお4月3日はイースター礼拝で、両教会に受洗者がいた。信愛教会で洗礼を受けたのは、河野光子さんと夏秋信邦君である。吉田教会では三瀬幸子さんが洗礼を受けた。5月22日(日)には吉田教会の別帳会員であった村上照子さんが現住会員に復帰する。

この春に信愛教会の礼拝に顔を見せ始めた一人が大西正一さんである。彼は八百屋さんで、商店街の一つ教会側の通りに店があった。大西さんは「南風」という劇団の主宰者で、仕事よりも若者を指導する演劇に情熱を燃やしていた。教会でも大きな声で「塩野さんの説教よりも奥さんのオルガンの方がええな」と、いかにも大西さんらしく話していた。清水敏幸さんは6月に愛媛インフォメーションシステムズという会社を設立するにあたって、教会への出席を始めた。20歳代後半のAもそんな一人で、教会では無口だった。彼のお宅を訪ねると病気がちのお母さんがおられ、彼の口からは「カバンから女の生首が出てきた」といった妄想の生み出す話が次々と出てくる。Aは統合失調症だった。それでも1時間余り「そうですか。そうですか」とうなずきながら聞いて、失礼する。話を聞くしか何もできなかった。吉田教会の礼拝に出席を始めていたのは奥平佐恵子さん(離婚後は「大久保」姓を名乗る)である。小さな子ども2人を育てる彼女は、生命保険と化粧品のセールスで生計を立てていた。

その頃には火曜日・木曜日・金曜日・土曜日の午後は、新来会者を組み入れながら訪問活動に従事していた。曜日ごとに訪ねる地域を決めていたので、必要とされている家庭は確実に回ることができた。ところが、手順の狂う事態も発生した。その一つが訪問予定よりも優先した病人のお見舞いである。3月に吉田教会での礼拝後に榎本夫妻から呼び止められた時もそうであった。沈痛な表情をした榎本喜一さんが言われた。

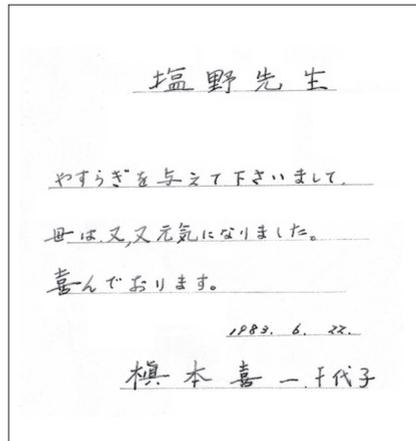
榎本 実は母が入院しております。

塩野 早速、お見舞いに伺いましょう。

榎本 ありがとうございます。それが……、昨日のことですが主治医から「母の余命はあと2週間なので、覚悟をしておくように」と言われたのです。

塩野 それはご心配ですね。

翌日から衣服を整えて、面会時間の午後に市立宇和島病院を訪ねる。病室には夫妻がおられる場合と、榎本千代子さんだけの時もあった。お訪ねすると、了解を得た上で手に触れた。やせ衰えた手で、最初に触れた時には反射的に「痛い！」と言われた。それでも十分に注意してそっと手を握り、祈る。病人も静かに耳を傾けているように思えた。滞在時間は10分程で早々に失礼する。それから毎日決まった時間に訪問を続けた。1週間が過ぎると、待っていたかのように手を出される。祈り終わるとお顔が安らいで見える。訪問は1週間、2週間、1カ月と続いた。そして5月も過ぎたある日、宇和島の自宅に退院されることになる。退院の記念に榎本さんから頂いたH. W. ヴォルフ『旧約聖書の人間像』の見開きの頁には、榎本夫妻の感謝の言葉が記されていた。



榎本夫妻の感謝の言葉 (1983年6月)

1983年度の標語は「教会の形成」で、春の特別集会には棟方文雄牧師⁵⁾(西宮教会)を招いて6月5日(日)に行った。

朝の礼拝 朝10時15分 信愛教会

ロマ書8章28-30節 「摂理の信仰」

講演会 昼1時 信愛教会

ルカ福音書19章26-27節 「教会を守る」

夜の礼拝 夜7時 吉田教会

マタイ福音書9章9-13節 「創造の神」

講演会は次のように始められた。

教会を与えられている私たちは教会を守っていく責任がある。教会を大切なものとし、生活の基盤にすえ、教会が安全に成長すべく努めねばなりません。

*

教会学校夏期ディキャンプ(7月29日, 広見町安森洞), 分区中高生夏期キャンプ(8月9日-11日, 由良半島後)を終えると, 8月29日(月)から9月3日(土)まで夏期休暇だった。弟塩野清の運転するスカイラインで29日に宇和島を発ち, 小原安喜子先生が勤務しておられる施設邑久光明園を訪ね一泊した。まず宿舎に小原先生を訪ねると, インスタント食品で山になったコーナーを指して, 「滞在中はこれらのどれかを食べてもよろしい」と許可された。その上で「突然の手術が入ったりして私の仕事は不規則なので, 家の出入りも自由です」と説明された。それから光明園家族教会(津島久雄牧師)まで案内いただき, そこで別れる。それ以降, 滞在中に光明園で小原先生と会うことはなかった。教会に上がらせていただくと, すぐに教会員の方が食べやすく切ったスイカを運んできてくださった。ところが, ハンセン氏病患者を目の前にするのが初めての私にはスイカの味はしなかった。翌朝はスピーカーから聞こえてきた放送にドキッとす。

5) 棟方先生は食事を大変喜んでいただき, 「宇和島は美味なところであった」とお便りを下さった。

今、光明園に牧師さんが来ておられます。朝10時からの礼拝で話をしていただきますので、みなさん光明園家族教会にお集まりください。

流されている「牧師」とは私のことに違いない。何の打ち合わせもしていなかったが、放送された以上参加するしかない。朝10時前には教会を訪ね、礼拝に出席した。マタイ福音書12章46-50節をテキストにして、「故郷を思う」と題して説教する。ところが、いつになく大きな声を張り上げ情熱をこめて説教している自分に気づく。聴衆が食い入るように聞いていたからである。讚美の歌声も会堂を揺るがすばかりにどよめいていた。礼拝を終えてからは多くの方と握手し、言葉を交わして別れた。昨日、スイカの味がしなかったのはウソのようだった。

半日研修会（9月4日、テーマ「教会の形成」）を信愛教会で行って間もなく、菊澤敏光さんが吉田病院に入院した。お見舞いに行くと起き上がりベッドの上に座られたので、お祈りをする。帰りがけに言われた言葉はこうであった。

インマヌエル、アーメン！

神が共にいますから、安心して手術を受けます。

教会の皆さんにも、教会学校の人々にも、「心配はいらない」とだけ伝えてください。

10月になると日の暮れが早くなる。その日も夜7時を回り暗くなっていた。すると暗闇の中から「ドン！ドン！ドン！」と教会の玄関をたたく音がする。慌てて出てみると、30歳代半ばと思われる男性が立っていた。ゲートの向こうには小学校低学年の女の子が泣きながら、「お父さん、お父さん」と呼んでいる。閉められたゲートを飛び越えて、懸命に玄関の戸を叩いている男性に異常な雰囲気を感じた。

いきなり彼は言った。

先生、私には悪霊が憑いています。どこの神社に行っても、お寺に行っても、教会に行っても悪霊を追い出してもらえないのです。この教会が最後だと思って、お願いにきました。



教会玄関を叩く男性（1983年10月）

「分かりました」とだけ答えて、まず女の子を塩野まりに見てもらうため牧師館へ案内した。それからBと第1集会室に入り、ひたすらに「そうですか」「そうだったんですね」とうなずきながら、彼の話を聞く。Bは真剣そのもので、いずれも彼にとって重い話だった。1時間余りして話しが途切れたので、そのタイミングを捉えて尋ねた。

塩 野 それで、悪霊を追い出してほしいのですね。

Bさん そうです。お願いします。

塩 野 ここは教会ですので、聖書を読んでお祈りをします。よろしいですか。

Bさん よろしくお願いします。

それからマルコ福音書8章25-27節を読み、声を張り上げて祈った。

主イエス・キリストの御名によって命じる。

悪霊よ、この人から出ていきなさい！

祈り終わると、Bは「先生、体が軽くなりました。悪霊が出ていきました。ありがとうございます」と言って、たいそう喜ばれた。それから財布を出して、「いくらお札を差し上げたら、よろしいでしょうか」と尋ねられた。それで「お札はいりません。お嬢さんと家に帰って、安心して暮らしてください」と返事する。さらに「これからも困ったことがあれば、いつでも教会を訪ねてきてください。話を聞いて祈ってあげますから」と加えた。Bはそれから数カ月に一度は訪ねて来たので、その度に話を聞き聖書を読み祈った。電話でも同じようにした。教会では月に1回、寺坂ミツルさんに手伝ってもらって、週報を発送していた。寺坂さんが宛名を書き、私の手紙を添えて送ってくださる。Bにも週報を送り続けた。

(4)

11月には画家田中忠雄先生をお招きして、信愛教会の教会創立95周年記念集會を開催した。田中先生は第12代田中兎毛牧師の長男で、戦前に宇和島に来たことがある。都築續さんや平井光子さん、山本登美子さんは当時を覚えていて、旧交を温めておられた。記念集會は次の通りである。

5日(土) 夜7時 信愛教会 特別集會 講師 田中忠雄

6日(日) 朝10時15分 創立95周年記念礼拝 説教 塩野牧師
創世記28章10-24節 「これが天の門だ」

6日(日) 夜7時 吉田教会 特別集會 講師 田中忠雄

集會では、スライドで映し出されたご自身の作品に自らの人生を重ね合わせ分りやすく話して下さった。聴衆の多くはうなずきながら聞いている。信愛教会の礼拝を終わり一段落すると、田中先生から誘い掛けがあった。

僕はコーヒーが好きでしてね。

吉田に喫茶店があれば、夜の特別集會までの間にちょっとゆっくりしたいんだが、……。

それで早い目に宇和島を発って吉田へ出かけた。教会から吉田病院の前を過ぎたところで左折し、立間川を渡った左手に喫茶店があった。川越しに吉田の町並みを眺めながら、田中先生夫妻とゆったりとコーヒーをいただく。とても喜んでいただき、感慨深そうに先生はおっしゃった。

吉田にもこんなおいしいコーヒーを出してくれる店があるんですね。いやあ…、驚きました。

吉田教会関係者の西田哲二氏が11月15日(火)に亡くなられたので、20日(日)午後教会で記念式を行った。佐川七生さんの兄である西田氏は、和代・三菜・相子3姉妹の父親である。2年前のクリスマスに洗礼を受けた西田相子さんの真剣な表情を思い出し、「彼女にはお父さんの体調に対する不安がすでにあったのかもしれない」と思った。12月25日(日)の吉田教会におけるクリスマス礼拝で、西田三菜さんが洗礼を受けた。こうして西田三姉妹は全員が吉田教会の会員となる。

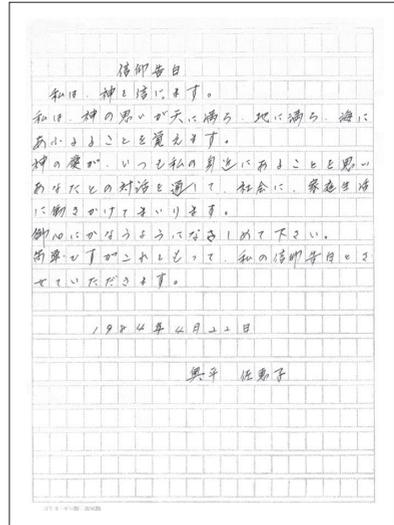
1984(昭和59)年3月から4月にかけて南予分区の教師に移動があった。宇和島中町教会と三間伝道所を担当していた森場政吉牧師が3月末で辞任し、引退された。ただし教会近くに転居し、4月以降も中町教会への出席は続けられた。後任には浦上結慈先生が着任する。近永教会の盛谷祐三牧師も3月で辞任し、長崎平和記念教会へ転任された。芦名弘道先生が後任として来た。

*

1984年度から金曜日は隔週で吉田教会の滞在日とし、木曜日の第1週は原則として信愛教会の牧師面会日とした。吉田教会滞在日の午前中は教会にいたが、次々と訪ねてくる人があって休む間もない。なかでも菊澤敏光さんはお弁当持参で来たので、昼食を共にする。午後からは訪問に出かけたが、これにも同伴された。訪問先は教会関係者中心だったが、菊澤さんの知り合いも加えた。ある時は吉田町の海岸沿いにある工場を訪ねた。菊澤さんが玄関の戸を開けて「ごめんください」と大きな声を掛けると、驚いたような表情で一人の女子従業員が出てきた。すると彼女に向かって、「頑張っているか。そうか、偉いぞ。何かあったら、いつでも話に来なさい」と語りかけている声が聞こえてきた。女子従業員は菊澤さんがかつて養護クラスで教えた生徒

だった。吉田教会のイースター礼拝（4月22日）で奥平佐恵子さんが洗礼を受ける。壮大な彼女の信仰告白は礼拝参加者の心に深く響いた。

吉田教会の三瀬幸子さんから5月に入って相談を受けた。「うちの前のお宅の朝岡さんが大変気の毒なことになっています。宇和島東高校に通っていたお孫さんが自殺されたんです」。早速、三瀬さんの案内で朝岡さんを訪ねると、仏壇の前に通された。仏壇に一礼して向き直ると、朝岡さんの御主人（自殺した高校生の祖父）と朝岡さん、それに三瀬さんがおられる。「仏壇の前ではありますが」と断って、「悲しみと祈り」について話す。



「神の思いは海にあふる」
（奥平佐恵子の信仰告白、
1984年4月22日、吉田教会）

悲しい時は何をしても悲しいものです。そんな場合には無理に悲しみを断ち切ろうとしないで、悲しだけ悲しまれたらいいのです。ただ、その悲しみをお孫さんに対する祈りへと変えるのです。悲しむ心をもって「どうか孫を守ってやってください」と祈ってください。人のために祈ることをとりなしの祈りと言います。聖書ではとても重要な祈りの一つがこのとりなしの祈りです。

話し終わると、朝岡さんから「ぜひまた聞かせていただきたい」と言われた。そこで、仏壇の前における小さな集まりをしばらく続けることにする。秋になると「もっと多くの人に聞いてもらいたい」と希望が出る。そこで会場を料理教室の三瀬宅に変更し、知り合いにも呼びかけ家庭集會として集まる。

その頃信愛教会を訪ねてきた一人に稲葉哲也さん⁶⁾がいる。視力障害者の彼は東京でリンパ液の働きを活性化する針治療を習得して、宇和島へ帰って来ていた。稲葉さ

6) 稲葉哲也さんについては参照、「清掃の心」（塩野和夫『一人の人間に』71-73頁）

んの治療を受けると体が軽くなった。商店街を本町追手まで上ったところに洗練されたカフェ壘がある。思いがけないことに壘を経営する大本洋子さんも訪ねてこられた。それ以来、壘にはたびたび出かけるようになる。宇和島ではよく知られた店の若主人Cが来たのもその頃である。「結婚に失敗しました。三浦綾子が好きなので、彼女の作品について話を聞かせてもらえませんか」という希望だった。それで『氷点』や『塩狩峠』など、三浦作品について1時間ばかり話をする。それから毎月来られたが、不思議と自分の問題については何も話さなかった。

*

4月には信愛教会の創立百周年記念事業委員会を立ち上げて1年が経過していた。委員会が主に取り組んでいたのは百年史編纂事業で、基本史料である総会議事録・役員会議事録・週報を丹念に読み続ける作業に変更はない。しかし、新たに個別教会史編纂の方法論検討とそれに基づく概説執筆が加わった。他方、吉田教会でも信愛教会に刺激されて、90年史編纂への期待が高まった。そのために通常の業務を終えた夜8時過ぎから毎晩のように牧師室に閉じこもり、両教会の教会史編纂作業に取り組む⁷⁾。

1984年度の標語を「伝道」と決めて、春の特別集会の準備を進めていた。しかし、講師の田中伊佐久牧師（京都丸太町教会）との日程調整に手間取り、7月1日(日)になってようやく予定（7月15日、テーマ「伝道」）を公にできた。ところが、直前に田中牧師から連絡が入り、特別集会は「健康上の理由」により中止となる。

8月2日(木)に教会学校ディキャンプを近永教会で行う。南予分区中高生キャンプは7日(火)から9日(木)に由良半島後で実施され、講演を担当した。12日(日)に信愛教会で大庭和子さんが洗礼を受ける。26日(日)の礼拝後は中平常太郎氏の記念会で、関係者が多く集まった。9月2日(日)に吉田教会で「伝道」をテーマに半日研修会を行う。10月21日(日)には恩師深田未來生先生（同志社大学神学部）を招いて、信愛教会と吉田教会で特別集会を開催する。信愛教会の講演「上着を脱ぎ捨てる」の結びは次の通りであった。

7) 宇和島信愛教会の百年史編纂作業については、参照、塩野和夫「あとがき」（『宇和島信愛教会百年史』261-262頁）伊予吉田教会の90年史編纂作業については、参照、塩野和夫「あとがき」（『日本キリスト教団 伊予吉田教会90年史』145-148頁）

私たちは毎日の生活の中で種々雑多なことに心を惹かれエネルギーを使います。忙しただあわただしく生きています。そんな中で私にとって何が一番大切なのか。何を自分は一番求めているのか。私にとってのイエスが曖昧になっています。意図せずして見えるものすら見えなくなり、道端に座り込んでしまいます。しかし、バルテマイはイエスに会うために上着を脱ぎ捨てた。そこには奇跡の第一歩があったのです。

10月22日に深田先生を松山空港までお送りする。別れる際に「これで奥さんと食事でもしてください」と言って、お小遣いを頂いた。

*

大久保佐恵子さんが11月28日(水)に吉田病院に入院された。胃がんだった。その日の夜、おばあさんから電話で言われる。

先生、助けてやってください。

私たちは一生懸命に祈ります。

先生、あの娘を助けてやってください。

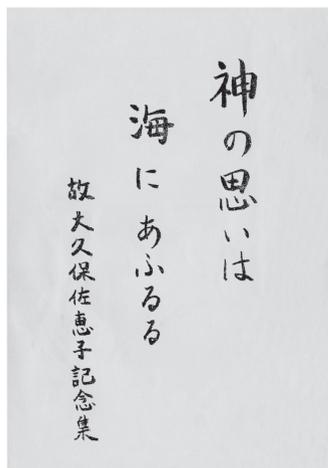
12月5日(水)の手術後に、主治医から「もう奇跡は期待できません」と告げられる。しかし、佐恵子さんを見守る人々に明らかな変化が起こっていた。だから、病に倒れるまでは一人で負っていた苦しみや重荷から解放されて、病床の佐恵子さんには安らかさがあった。2月に入り意識がもうろうとする中で、彼女から聞いた。

武も神様を拝みなさい。

神様にお祈りをしなさい。

大久保佐恵子さんは2月28日(木)に眠るように亡くなられた。告別式(3月2日[土])の式辞は2人の子息、武史君と直樹君への語りかけで結んだ。

真っ直ぐに伸びる一粒の麦。
つらさにも悲しみにも負けないで、
真っ直ぐに伸びる一粒の麦。
君たちのお母さんは、
あの麦のように立派に生きた人だった。
つらさの中でもおおらかに歌い、
悲しみの中からも人の慰めを祈った。
君たちのお母さんはそんな人だった。
そして、
君たちはそのお母さんの大切な宝物だった。



教会の自動車会計から30万円の補助を得て、1984年12月末に三菱自動車のトレディアに乗り換える。1985年1月下旬には新古品のワードプロセッサを購入したので、1月27日よりワープロによる週報となる。春の特別集會をキャンセルされた田中伊佐久牧師の申し出により、2月17日(日)の信愛教会は「祈祷の教会」と題して説教いただく。ところが、礼拝直後に「急な用事が教会にできた」と言い残して、田中牧師は早々に京都へ向かわれた。予定していた吉田教会での特別集會は塩野が代わって説教を担当する。そのため、謝礼は信愛教会分しか渡せなかった。後にこの件を取り上げて西村勝也さんが「恩義ある先生に申し訳が立たない」と主張され、教会は混乱する。南予分区では3月末に大洲教会の佐藤司郎先生が辞任し、後任に山本裕司先生が着任された。

「神の思いは海にあふるる
— 故大久保佐恵子記念集 —」
(1985年4月15日)

(5)

1985(昭和60)年度は信愛・吉田教会在任期の大きな転機となる。両教会はそれぞれの課題に向かって歩もうとしていた。信愛教会は創立100周年記念事業の具体的な検討と募金案策定のために委員を増員した。吉田教会は会員間に意見の違いはあったが、定住牧師招聘を課題とした。そのような中で自らの非力を痛感させられる出来事に次々と遭遇し、打ちのめされていった。

4月7日(日)のイースター礼拝(信愛教会)で清水敏幸さんが洗礼を受け、彼は

100周年委員にも加わった。教会の新しい動きを担う一人だった。吉田教会は2年後に迫る創立90周年に向けた計画を定め、夏には夏期伝道師を迎えることにした。他方、南予分区教育部における担当に加え、四国教区でも教区だより委員長（任期：2年）を引き受ける。山本裕司先生（大洲教会）と畠沢雄光先生（伊予長浜教会）の助力を得て、1年に2回、合計4回「教区だより」を発行した。1985年の年間標語は「伝道の展開」で、春の特別集会（5月19日）講師に信愛教会22代牧師の鈴木省吾先生（市川三本松教会）を招いた。

朝の礼拝 朝10時15分 信愛教会

コロサイ書1章15-20節 「キリストこそすべて」

協議会 昼0時30分 信愛教会

マルコ福音書12章13-17節 「伝道の展開 — 教会の危機と希望 —」

夜の礼拝 夜7時30分 吉田教会

ヨハネ黙示録22章12-21節 「永遠への招待者」

「キリストこそすべて」は次のように始められた。

キリスト教信仰とは、一言でいうならばキリストとの交わりに生きることです。これから信仰生活を送ってほしいという人にはただ1点、キリストとの交わりに生きることを望まれるかどうかを尋ね、信仰を勧めます。他のことは少しずつ分かっていけばよいのです。

宇和島市街から南に向かう国道56線沿いにある光来園（特別養護老人ホーム）には教会員の堀部直さんと寺坂ナカさんがいた。お訪ねすると満面の笑みで迎えて下さった堀部さんは茶道の教師をしていた。寺坂さんはアメリカでレストランの経営者であった。容体の悪化で堀部さんが入院したのは5月下旬である。7月17日(水)に亡くなると、医院から「すぐに亡骸を引き取りに来るように」と指示された。そこで直ちに医院へ向かい、直さんには牧師館の書斎で休んでもらう。彼女の横には塩野まりが一晩付き添い、私は前夜式と告別式の準備をした。告別式式辞の結びは次の通りである。

直さん、真っ直ぐにイエス様のもとへ行くんですよ。

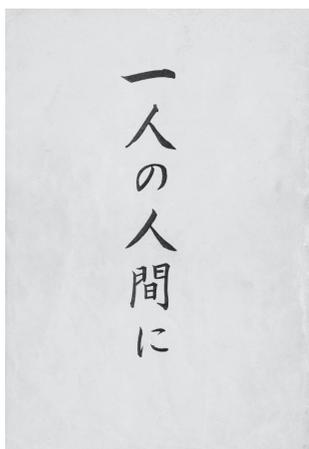
直さん、イエス様の下で今こそ安らぐんですよ。

直さん、どうぞあの笑顔でもって天国を明るく照らしてください。

大西正一さんから夕刊宇和島の記者宇都宮潤子さんを紹介されたのは5月だった。二人は事前の打ち合わせをしていたらしく、話は直ぐに本論に入る。「皮てんぶら」というエッセイのコーナーが夕刊宇和島にあって、宇都宮記者から「6月から3か月間、この欄を担当してほしい」という依頼である。大西さんも「塩野さんは文章が書けるけん、引き受けたらいいと思う」と口を合わせている。せっかくの機会でもあるし、引き受けることにした。皮てんぶら13回分のテーマは次の通りである。

ぼくの青春・点数の魔力・天に宝積める者・忘れえぬ師・無言有言の祈り・ありがきは友・真の愛国者・大きな心・無名でありなさい・私の宝・母のこと・宇和島体験

これらのエッセイをまとめて、小冊子「続 一人の人間に」を作った。だが、なぜ「続」なのか。実はかつて「一人の人間に」という冊子を作っていたからである。



「一人の人間に」1974
題字：塩野元治郎



「続 一人の人間に」1985

宇和島から南東の方向にそびえ立っている山は鬼が城である。6月だったと記憶するが、鬼が城のふもとで自動車に排気ガスを入れて自殺した人の記事が新聞に載っていた。自ら命を絶った人の名前を見て、「ええっ！」と心底驚いた。それはCだった。1年前から毎月のように教会を訪ねて来ていたので、彼とはすっかり親しくなっていた。話し始めると三浦綾子からキリスト教信仰、さらにCの家の商売も話題にのぼった。自殺する2週間くらい前にも会っていた。ただ、記事を見て思い当たることがあった。

そういえば「離婚した」という以外に、C自身について触れることはなかった。

三浦綾子やキリスト教信仰など人間の内面に迫る話をしながら、Cはどことなくよそよそしく感じられた。

そのような語り口のどこかに、彼の心からSOSが発せられていたのではなかったか。なぜそのことに気づこうとしなかったのか。

関谷直人夏期伝道師（現在、同志社大学神学部教授）が7月31日(水)から9月2日(月)まで吉田教会牧師館に滞在し、教会活動に参加した。その間、夏期行事としては教会学校夏期ディキャンプが8月2日(金)に柿原「ちびっこ広場」で、南予分区分区中高生夏期キャンプが8月6日(火)から8日(木)まで三浦半島大内で、松山教会中高生キャンプが8月14日(水)から16日(金)まで吉田教会で行われた。8月18日(日)に早見香菜子さんが信愛教会で洗礼を受けた。9月1日(日)には信愛教会で半日研修会（テーマ「伝道をどうしたらよいか」）を開いている。

9月になった頃、大柄で20歳代後半と思われる青年Dが教会を訪ねて来た。彼は片足に障害があるため、歩き方は不自然に見えた。Dはいきなり直面している問題を持ち出してきた。

足が不自由で、家業を継ぐことができないんや。

家業の話をする時、Dはひどく緊張して不安そうに見えた。それで差しさわりのない周辺の事柄を話題にする。1時間も話し合っていると、彼は穏やかな顔になっていた。そんな話し合いを何回か続けていた時に、Dのお母さんから電話がかかる。緊張した声でお母さんは尋ねられた。

息子が見当たらないのです。もしかしたらそちらの教会に行っているのではないかと思い、電話をさせていただきました。最近、「信愛教会へ行って、話を聞いてもらっている」と言っていましたから、……。

数日後の新聞に、「川で青年の溺死体があがった。誤って川に落ちたと思われる」と報道されていた。直感的に「この青年はDで、彼は川に飛び込み自殺したのだ」と思った。

Dのお母さんから電話があつて1週間ほど経った頃に、1通の手紙を受け取る。差出人の住所や氏名からBの関係者であることは間違いなかった。手紙には次のように記されていた。

Bが大変お世話になりました。けれども、今後彼への手紙は不要です。Bは亡くなったからです。

手紙には死因を書いていなかった。けれども、「Bも自ら生命を絶つたに違いない」と思えた。CもDもBも抱えている問題を直視していた。彼らは純粹だった。だから、彼らと語り合った時間は「かけがえのない大切な時だった」と思われた。そうであるのに、何の力にもなつてやれなかった。数カ月の間に3人を失つて、何度となく深い喪失感に襲われた。吉田から宇和島へ帰る途中に知永峠がある。その日は金曜日で、吉田滞在日の仕事を終え知永峠にかかったところだった。突然一本の道が何重にも見え、車の操作に緊張が走る。それは「疲れがたまり、危険な状態にある」という心身からの警告に違いなかった。

*

松山キリスト教書店の平岡信司さんは月に一度キリスト教書の販売で来ていた。信愛教会に駐車場があつて安心できるためか、彼は第1集会室で1時間はゆっくりと過ごすようになっていた。すると大館義夫先生（城辺教会）が来られて、3人で話し込むのだった。10月に平岡さんから思いがけない提案があつた。

キリスト教出版業界では新しい執筆者を探している。塩野先生ならお書きになれるのではないかと思います、推薦している。そこでこの半年くらいの間に原稿用紙で500枚程度 of 原稿を用意してもらえないだろうか。新教出版社の森岡巖社長が松山に来られた際にお渡しし、検討してもらおうと思う。

突然の申し出だったので即答できるはずもなく、その場では「しばらく考えさせてもらいたい」と答えておいた。

秋の特別集会には筋ジストロフィーを患っておられる難波紘一先生を講師に迎えて、集会を持った。

朝の礼拝	11月10日(日)	朝10時15分	信愛教会
昼食会	11月10日(日)	礼拝後	信愛教会
夜の礼拝	11月10日(日)	夜7時	吉田教会
講演会	11月11日(月)	朝9時	広見町三島公民館

朝の礼拝(ヨブ記2章1-10節, 「苦しみを担う者の信ずる所」)の冒頭部分は次の通りである。

この病気になり間もなく8年になります。足は動かなくなり、手も不自由です。病気が進むと、飲み込む力もなくなり、心臓を動かす力もなくなってしまいます。むごたらしく、悲惨な病気です。

12月8日(日)には信愛教会の創立97周年記念礼拝に第21代牧師の種谷俊一先生(尼崎教会)を招き、吉田教会でも午後4時から礼拝を行った。信愛教会における説教「墓に収めて」(マルコ福音書15章42-47節)は次のように始められた。

イエスの埋葬をマルコは簡潔に書きます。医者 of 死亡診断書 of ようです。花も供え物も何もない。1枚 of 麻布だけです。犯罪人のため権力 of 圧力があり、人目を忍び取り急いでなされた埋葬であったのだろう。昭和16年春、軍隊を脱走した兄 of 亡骸が焼かれた印象と重なる。やるせない気持ちで兄 of 遺体が焼かれるのを見たのだった。

種谷先生の時代には牧師館がなく、なつかしそうに「講壇右横のスペースに2段ベッドを造り、そこで寝ていた」と話しておられた。

12月22日(日)の信愛教会クリスマス礼拝で大本洋子さんと藤野晴男さんが洗礼を受けた。1986年3月30日(日)のイースター礼拝には信愛教会で畑野暢子さんが洗礼を受けた。すると、教会に通い始めていた30歳前後の女性が大本さんを中心に集まり、2月6日(木)に白百合会を結成する。白百合会の例会は「結婚と家庭を考える」をシリーズとして行い、10名を越える参加者があった。

- 第1回 序論
- 第2回 人格としての人間
- 第3回 幼児期・児童期
- 第4回 アンケート「夫婦の役割期待」
- 第5回 青年期
- 第6回 成人期
- 第7回 ユング心理学におけるタイプ
- 第8回 幸福を創る結婚生活とは
- 第9回 結婚への成熟性
- 第10回 結婚生活

*

信愛教会は慎重な議論を重ねて1986(昭和61)年度から百周年募金を始める。7月には第1期工事として教会の掲示板と看板の設置工事を行った。吉田教会では創立90周年記念の準備を初め、90年史の表紙を菊澤尋吉さん(菊澤敏光さんの兄)にお願いする。また、隔週で金曜日に実施していた吉田教会滞在を事情により夜まで延長した。

「家族の救い」を年間標語として春の特別集会(6月8日)に第14代牧師 大山寛先生(土佐教会)を迎え、朝の礼拝(信愛教会、朝10時15分)と夜の礼拝(吉田教会、夜7時)を行った。大山先生が寄せて下った祈りの言葉は次の通りである。

天のお父さま

あなたの不思議な御摂理のうちに、50年前に御教会に遣わされまして、久しく交わりをなし、宣教を共にし、み言を学んでまいりました。まことに弱くもあり、町の姿も変わりまして、今昔の感に耐えないものがございしますが、御教会とともにある50年前に立ち帰る思いがいたします。

今般、この足りないしもべを通して御業をなしたもうた恩寵は、どうか塩野牧師とその家族とを通して、また御教会の役員はじめすべての人たちを通して、なくてはならぬ福音が誰も持っておりませんこの福音をこの宇和島の市民に宣伝伝え、証しされることができますように祝福してくださいませ。

主の御名を通してお願い申し上げます。 アーメン

1985年に3名の自殺者を出し、立ち直れないでいた者の心に響いた情報があった。松山教会で6月23日(月)に開かれた同信会において、中村博牧師(松山教会)から発題のあった「心の講座」である。役員会の承認を得て、7月21日(月)・8月18日(月)・9月22日(月)と松山教会で開催された「心の講座」に参加する。講師の精神科医平山正実先生は具体的な事例をあげながら、「急速に変化する時代にあって、人間の心が抱える問題は多様化している」と説いておられた。

今井牧人神学生を7月25日(金)には夏期伝道師として招き、吉田教会に滞在し教会活動に参加してもらった。7月27日(日)には吉田教会で本井澄江さんと本井静さんが別帳会員から現住会員に復帰した。夏期行事として、教会学校夏期キャンプが8月7日(木)から8日(金)に三間基幹センターで、南予分区中高生キャンプが12日(火)から14日(木)に由良半島後で行われた。

(6)

吉田教会の来会者にE・F夫妻がいた。二人はいずれも牧師家庭の育ちである。ある夜、Eのお父さんから「息子をよろしく願います」と電話が入る。そこで、子育てに忙しい専業主婦のFと「吉田滞在日の夜にお宅を訪問するように検討しよう」と話し合う。加えて、信愛教会の百周年記念事業で作り直すことになった説教壇と聖餐卓製作の依頼者山本文義さんは吉田町の在住者で、夜しかゆっくりと時間の取れないことが分かる。これらの事情で1986年度より吉田滞在を夜まで延長した。菊澤さん

と別れてまず訪ねたのは吉田高校の校長宅である。高校近くの宿舎に単身赴任しておられた校長から吉田高校で教える面白さを聞かせていただく。次いで立間川を越えて山本宅へ向かう。仕事の打ち合わせを終わると、山本さんから大工仕事についていろいろな角度から興味深く聞かせてもらう⁸⁾。最後がEF宅である。「夜の最後に来てほしい」とFから希望が出ていたためである。彼らの家には菊澤宅の前を通って行く。後に分かった事実であるが、菊澤さんは自宅の窓を開けてEF宅へ向かう私を見ていた。そして、足取りも重くどたどたと歩く私の姿を「どた靴」と呼ばれた⁹⁾。牧師の来訪を予想して、ほとんどの場合Eは帰っていなかった。そういう時は玄関でお祈りだけして失礼した。

「心身の様子がおかしい」と塩野まりから告げられたのは、8月に入って間もない日だった。いつものように「牧師はしゃんとしていなさい!」と励ましてくれる彼女の身に何かが起ころうとは想像もしていなかった。聞いてみると牧師不在の教会や牧師館では、教会員が直接牧師には言いにくい問題を牧師夫人に話したり、その他に思いもよらない事態が発生していた。それらを原稿用紙にまとめる一方で解決策を求め思いめぐらして思い当たったのが、「心の講座」講師の平山正実先生である。そこで事情を記した原稿用紙を添えて送り、面談を希望した。

平山先生から指定された港区南青山の喫茶店でお会いしたのは、夏期休暇中の8月下旬である。丁寧に原稿を読んでおられた先生はまず言われた。

このような原稿を他人が持っているべきではありません。返却しますので、処分されたらよろしいと思います。

次に、私たちの現状に対する先生の見方を話された。

拝見する限りでは、このまま宇和島に留まっておられたら奥様だけでなく、牧師先生の生命も保障できません。それほど事態は切迫しているとみるべきでしょう。

その上で、具体的なアドバイスをされた。

8) 山本文義さんについては、参照、「職は人なり」(塩野和夫『一人の人間に』74-77頁)

9) 参照、「どた靴の詩」(塩野和夫『問う私、問われている私』4-5頁)

生命を守るために、奥様はしばらく宇和島を離れるべきです。ご実家が大阪にあるようなので、少なくとも半年は宇和島を離れてご実家でゆっくりと静養し、心身の回復をはかって下さい。

思いもしなかったアドバイスに、私たちはうなだれて喫茶店を後にした。示唆を受けて10日間あまり、「心身に問題が生じるまで牧師の仕事を支えてくれた妻について」、「妻の身に問題が生じている事実全く気付かなかった自分について」、「牧師の仕事続けることと家庭生活について」など、いろいろな思いが頭の中を駆け巡った。しかしいずれにしても、塩野まりを大阪の実家へ送り出さなければならない。彼女を送り出した9月14日(日)朝、妻の手を握り慟哭した。その日の礼拝で「ここから始まる」(使徒行伝13章1-13節)と題する説教をした。結びは次の通りである。

己を空っぽにする時、そこから新しく始められるのです。なぜならば、聖霊はからっぽになった私たちに注がれるからです。自己主張でいっぱいの人、生き方へのこだわりでいっぱいの人には聖霊も働きようがありません。だから砕かれることも時には良いのです。私たちは呻きます。つらいです。しかし、ここから始まるのです。神の祝福は空っぽになった私たちから始まるのです。

*

塩野まりを大阪へ送り出してから、たびたび電話したのが宮崎達雄牧師(松山古町教会)である。彼とは教会の問題を話し合った。信愛教会の困難な状況を紹介すると、宮崎牧師は「同じような問題がありますから、よく分かります」と共感してくれた。彼が古町教会の問題を出すと、似たようなことが信愛教会でもあったので、頷きながら「よく分かります」と答えた。宇和島では訪問活動の前後に八百屋の大西さんを訪ねた。ひとしきり芝居の話をしてから大西さんは「自分の所にまで聞こえてくるんだが、……」と切り出して、教会の問題に対する彼の見方を聞かせてくれた。

大西 宇和島でもいろいろな話は聞いてきた。けどな、今回の教会における問題、これほどえげつない話は聞いたことがない。

塩野 牧師に反対している人たちの教会に対する帰属意識が深いからです。

大西 西村勝也さんがいろいろ動いていると聞こえてくるで……。

塩野 若い人たちが洗礼を受けて、このままでは「塩野の教会になってしまう」と言っているようで、危機意識が強いのでしょうか。

大西 先日も京都まで行って、田中とかいう牧師に塩野さんの悪口をさんざん言ってきたそうやな。

塩野 聞いています。田中牧師は彼らの仲人なので話を通じるのでしょうか。

大西 それにしても塩野さん、大変やな。教会という所もほんとうにむつかしいな。

秋の特別集会は飯清牧師（霊南坂教会）を招いて10月12日（日）に吉田教会（昼3時）と信愛教会（夜7時）で開いた。塩野まりは11月上旬には帰って来てくれた。

90歳を越えていた山下フサさんが11月13日（木）に病床上で洗礼を受けた。土曜日夕方方の訪問を楽しみにしながらも、「私は門徒ですから」と自分の立場を大切にしておられた。ところが手術を受けるにあたって、「キリスト教徒になろう」と決意された。手術前に一つだけ聞かれた質問がある。

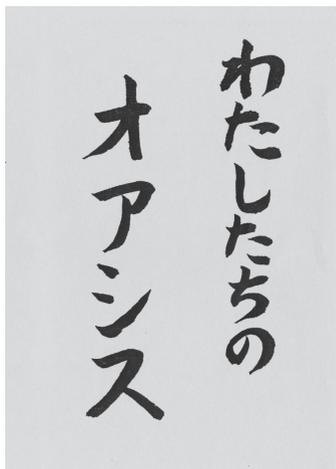
山下 仏教における念仏のようなものがキリスト教にもあるのでしょうか。

塩野 あります。「インマヌエル、アーメン」と言うのです。「インマヌエル」とは「神様が私たちと共にいて下さる」という意味です。「アーメン」は「心から願います」です。この「インマヌエル、アーメン」を吸う息と共に、吐く息とともに唱えるのです。そうすると、心も体も「神様が共にいて下さる」という思いで満ちてきます。

山下 それでは手術の際に「インマヌエル、アーメン」と唱えることにします。

塩野 ぜひ、そうしてください。

冊子「わたしたちのオアシス」が11月23日（日）に出た。朝岡さんのお宅の仏壇の前から始まったミニ家庭集会で語りかけていた講話集である。関係者が手分けして録音を文章にし、さらに冊子としてまとめてくださった。1987（昭和62）年1月19日（月）には松山で新教出版社社長森岡巖さんと会った。平岡さんの推薦について思いめぐらす中で浮かび上がったのは祈祷会における聖書講義である。祈祷会という教会の現場で話され聞かれた聖書の言葉、具体的には創世記の学びをまとめる。それが出版に値



「わたしたちのオアシス」1987



『祝福したもう神』
新教出版社，1987

するかどうかは分からない。しかし、「現場で聞かれた聖書の言葉には本とするだけの意味がある」と思われた。原稿は4月に『祝福したもう神 — 創世記の学び —』として新教出版社から刊行された。

*

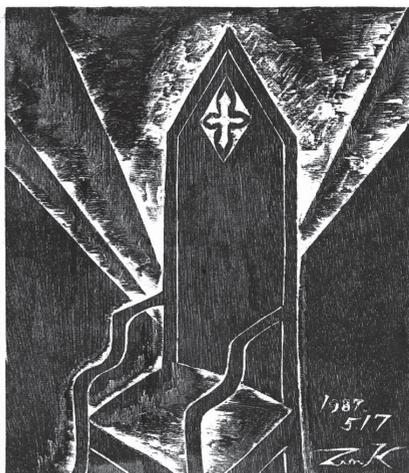
信愛教会のイースター礼拝（4月19日）で松村龍二さんが洗礼を受けた。誠実な人柄で、宇和島在任時には同期生におけるピアノ販売で連続して日本一の実績を上げている。信愛教会では創立100周年の2期工事として会堂天井張替や塗装工事、照明器具の取り換えを行った。吉田教会では5月17日（日）午後2時より創立90周年記念礼拝を挙行し、出席者には『伊予吉田教会90年史』と版画「光を放て」を贈呈した。版画に添付した説明文は次の通りである。

版画「光を放て」

『伊予吉田教会90年史』表紙のスケッチに教会を訪ねた菊澤尋吉氏の目を奪ったのが、講壇の椅子であった。木製で背もたれの長い椅子に「生命的なものを感じた」と菊澤氏は言われる。伊予吉田教会は1979（昭和54）年に会堂を改築し、その



『伊予吉田教会90年史』



版画「光を放て」

際教会に備えられていたほとんどすべての物は新調した。その中で、わずかに記念として残された一つが講壇の椅子である。言うまでもなく、福音主義教会の生命は礼拝説教にある。礼拝説教によって教会は立ちもし倒れもする。教会は礼拝説教によって光を放ち続ける。講壇の椅子は教会の生命である説教を守り、温め、放つ場であった。吉田教会旧会堂が建設されたのは、1932（昭和7）年であり、それ以降時代の波を越え一貫して講壇から説教は語り継がれてきた。その影響は測り知れない。なお題名の「光を放て」はイザヤ書60章1節から採った。伊予吉田教会が神の言によってさらに豊かに広く深く「光を放つ教会であるように」との祈りを込めて。

なお、信愛教会で開催された南予分区総会（4月26日）で分区長に選出される。4月28日～29日に松山で開かれた教区総会では森分直樹牧師（八幡浜教会）が教区総会議長に選ばれた。

1988（昭和63）年度の標語は「協力伝道」で、5月24日（日）に前任の第24代牧師栗原昭正先生（高崎教会）を迎えて春の特別集会を開いた。

朝の礼拝 朝10時15分 信愛教会

協議会 昼食後から3時まで 信愛教会 テーマ「協力伝道」

夜の礼拝 夜7時 吉田教会

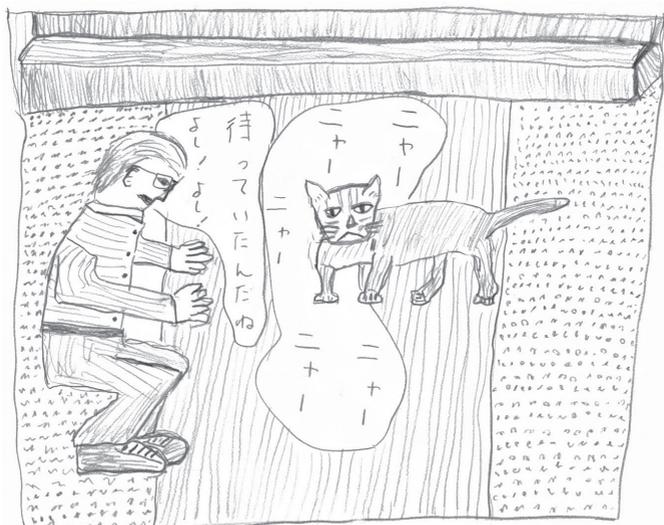
信愛教会における説教「神のみ業が現れるために」(ヨハネ福音書9章1-7節)の結びは次の通りである。

西村久蔵は旧制中学4年生の時に落第をしました。落第し手について謝る久蔵に父親は言ったのです。「なあに、人間ちゃんと生きていれば失敗もいつかは勲章になる。人様の前で中学の時に落第をしたことがあると言える人間になってみろ。お父さんはな失敗は人間にはなくてはならないものだと思っている。そういう経験のない人間には人の涙も痛みもわかりゃしないのだ」と言ったのです。久蔵にはその時の父の言葉が生涯忘れられなかったのです。息子の失敗を息子の将来のために生かそうとする、それはキリストの福音です。

神戸女学院伝道キャラバン隊が7月15日(水)~16日(木)と吉田教会に滞在し、子どもを対象にした集会を信愛教会と吉田教会で開いた。中野敬一夏期伝道師は8月5日(水)より9月上旬まで吉田教会に滞在し、教会活動全般に参加する。8月6日~7日と教会学校夏期キャンプを三間町基幹センターで「教会が生まれた」をテーマに行い、32名の参加があった。南予分区高校生キャンプは11日(火)から13日(木)まで由良半島後で実施した。9月6日(日)には信愛教会で「協力伝道」をテーマに半日研修会を行った。

*

7月下旬のある日の午後に、信愛教会の駐車場に蹲っているものがいた。教会に向かって右側で少しくぼんだ場所のため、初めはよく分からなかった。近づいてよく見ると、顔にも体にも傷のあるやせた猫だった。「ネコさん」と声をかけると、「ニャー」と答えてくれる。シヤムネコで、首には古びた首輪をつけている。かつては飼い猫だったのだろう。数日後、吉田へ出かける前にも会ったので、「ネコさん」と声をかける。するとこちらに向き直って、「ニャー、ニャー、ニャー」と返事をし



ポー（猫，推定7歳）との出会い
1987年8月

てくれる。なぜか、鳴き声を痛々しく感じた。中野夏期伝道師と吉田から帰ってくると、駐車場で待っていた。「待ってくれていたんだね、ネコさん」と語りかけると、「ニャー、ニャー、ニャー」と声を張り上げている。吉田に犬猫医院があったので、中野神学生に連れて行ってもらう。その間に餌と器を買っておいた。診てもらったところ、眼や後ろ足の付け根に傷があって処置してもらう。獣医師によると、推定年齢7歳だった。その猫に「ポー」と名前を付けた。痩せて傷まみれのポーはそれでも純粋な心を失わず、風格を感じさせていた。どれほど私たちはポーに慰められたか知らない。

9月に入って、ふわーとした大柄なキジ猫が現れる。ポーの餌に気が付いてやってきたのだ。「ポーの餌だから」と言って追い払おうとすると、ポーが「ニャー、この猫にも餌をあげて」と叫んでいる。それでポーの言う通りにすると、おいしそうに食べている。それ以来、キジ猫は夜を牧師館で過ごし、昼間はご近所の浄満寺で昼寝をしていた。この猫に寅次郎（通称「トラ」）と名前を付けた。

(7)

秋に精神薄弱者施設 野村学園の生徒たちと先生が中型バスに乗り、信愛教会に来た。事前の打ち合わせに従い、1時間ほど会堂で歌ったりゲームをして遊ぶ。それから彼らはいくつかのグループに分かれて商店街へ出かけて行った。お小遣いを手にお目当ての買い物に出かけて行くのだが、どの子も本当にうれしそうなのである。その理由を尋ねると、引率の先生から「子どもたちは商店街へ行って買物をするのをずっと楽しみにしていましたから」と返事があった。野村学園で彼らは版画詩を作っていた。間もなくして送られてきた彼らの作品を目にして、息が止まるほど感動した¹⁰⁾。

しんあいきょうかいには
かみさまがいるきがします
すがたはみえないけれども
かんじでわかります
そして
ぼくたちをみまっています

《しんあいきょうかいのせんせい》
しんあいきょうかいのせんせいは
やさしくて
ピアノをひくおんなのせんせいの
ピアノにあわせて
おとこのせんせいが
うたをうたうのが
とてもじょうずです
ぼくたちは
きょうかいのうたを うたうのを
しずかにききました

10) 参照、「人の心の宝物」(塩野和夫『一人の人間に』68-71頁)

版画は思いもよらない形で1年ほど後に公にされた。

秋の特別集会は吉田満穂牧師（高知教会）を招いて10月24日（土）と25日（日）に開いた。

24日夜7時 伝道集会 信愛教会

25日朝10時15分 朝の礼拝 信愛教会

25日夜7時 夜の礼拝 吉田教会

吉田教会における「神の眼」（ヨハネ福音書1章43-51節）と題した説教の結びは次の通りである。

一番大切なものは豊かさではありません。イエスの見守りを知ることこそ一番大切なことです。姦淫を犯した女にイエスは言われました。「もう罪を犯さないように」。それは親が子に言う言葉です。過ちを繰り返すことを知っているのです。百も承知でイエスは「もう罪を犯さないように」と言われるのです。それはイエスは見守っていて下さるということです。なんとという幸いでしょうか。

信愛教会のクリスマス礼拝（12月20日）で稲葉哲也さんが洗礼を受けた。1988（昭和63）年3月20日（日）には信愛教会で松村洋子さんが、イースター礼拝（4月3日）では大西正一さんが洗礼を受けた。松村さんは多忙な塩野牧師のために教会事務を手伝っていた。大西さんは信愛教会で塩野牧師から洗礼を受けた最後の人となる。

*

3月も中旬になったある日の夕方、牧師館を訪ねて来た人がいた。出てみると、このころ礼拝に欠席がちな西村多見子さんだった。

西村 いろいろありまして、……。

塩野 信愛教会が大変なご迷惑をかけているのだと思います。

西村 それがあまりにひどいんです。他人の家庭をなんと考えているのかと思います。

塩野 「塩野先生は喧嘩が下手だ」と言う人がいます。でも、彼らと同じ土俵に乗ってやりあったら、それこそ教会は壊れてしまいます。

西村 先生のお立場はよく分かります。家でも、「塩野先生は忍耐して、本当によくやっておられる」と言っているのですよ。

塩野 「固く福音に立って、御言の説き明かしと祈りに打ち込む」、私にはこれしかありません。

西村 役員としての責任だけは果たします。けれども先生には申し訳ないのですが、とてもじゃありませんが信愛教会に留まることは出来ません。

塩野 よく分かります。

西村 娘の結婚のこともありますので、……。一段落してから宇和島中町教会に転会するかどうするのか、身の振り方は考えます。

塩野 祈っています。

西村多見子さんは主要役員の一人として、信愛教会を支えていた。田中伊佐久牧師を迎えた時には会計役員だった。それだけに西村勝也さんから執拗な批判を受けていたに違いない。あれ以来、彼女を信愛教会で見かけたことはない。

4月17日(日) 礼拝後に信愛教会の総会を行う。席上には久しく見かけない人が何人もいた。彼らが役員選挙のために動員されていたのは明らかだった。選挙の結果、前年度とはほとんどの役員が入れ替わった。4月26日(火) 午後7時から第1集会室で開かれた最初の役員会においてである。入室すると、議長席の前に録音用マイクやカセットが何台も置いてある。いきなり西村勝也役員が立ち上がり、発言した。

西村 私たちは塩野牧師を辞めさせるため役員に選ばれました。それで塩野牧師の発言を録音に取って一字一句を調べていきます。

塩野 穏やかではありませんね。

西村 数年前になりますが、恩義のある田中伊佐久先生に対する謝礼が他の先生方より少ないことがありました。こんなに申し訳ない事態もないと考えますが、最高責任者として責任のある回答をしてください。



ある日の信愛教会役員会（1988年4月）

- 塩野 その件については2通りの返答ができます。まず、特別集会では先生方に礼拝2回と講演会1回で、合計3回の講話をお願いしています。田中先生の場合、先生の事情により信愛教会における1回の説教だけでした。そこで、信愛教会分しかお礼を差し上げていません。もう一つですが、この件については両教会の会計役員で相談して決め、役員会がその報告を了承しています。さらに言うと、教会総会でも承認していますので、何の問題もないと考えます。
- 西村 これまでは自動車会計を牧師に任せてきました。それが適切に扱われていたかどうか、1円でもミスがないかどうかを確かめる必要があります。ここに関係する書類をすべて用意ください。

突然の申し出だったので、牧師館に行きすべての関係書類を持参する。

- 西村 これからは自動車会計を牧師に任せておくわけにはいきません。会計役員が担当しますので、承知ください。

目の前にいくつものマイクを置かれ、まるで検察官が被疑者を尋問するような異様な雰囲気の中で進められた。役員会を終えて牧師館に引き上げると、立っていることもできないほどに疲れ切っていた。自動車会計には1円のミスも見つからなかった。

*

ポーが3月に伝染性の不治の病にかかった。塩野まりが国鉄宇和島駅から自動車学校へ行く途中にある黒田犬猫医院まで、ポーを抱いて連れていく。すると、おとなしく抱かれている。病気で小さな体がさらに小さくなっていくが、それにもじっと耐えている。手を尽くして看病したが、ポーは5月に地上の生涯を終えた。不思議なこともあるもので、ポーを送って間もない時だった。会堂の裏で子どもたちが段ボール箱で遊んでいる。よく見ると生後1か月くらいの小さな猫の家を作っていた。「はにまる」とか「ミッキー」と呼ばれていた赤ちゃん猫は、小さな体と同じくらいの長さがある立派な尻尾をしていた。この猫も飼うことにして、「玉三郎」（通称「タマ」）と名前を付けた。

新年度が始まって間もなく、藤井三男さんが市立宇和島病院に入院された。それで連日お見舞いに出かけ、祈っていた。その日も見舞いに行った帰り道だった。ぱったり出会ったのは、宇和島中町教会の渡部淑子さんだった。

渡部 塩野先生、どこへ出かけておられたんですか。

塩野 市立宇和島病院へ、藤井三男さんのお見舞いに行っていました。

渡部 藤井三男さんと言うたら、塩野牧師を追い出そうとしている役員じゃないですか。

塩野 よくご存じですね。でも私は牧師ですから、会員が病気になるれば出かけて行って、その人のために祈ります。

渡部 塩野先生を追い出そうとしている、そんな人のために祈ってあげるのですか……?!

そういうと渡部さんは目の周りを赤くして、通りであることにもお構いなしに泣きだされた。



通りで泣かれた渡部淑子さん（1988年5月）

渡部 塩野先生という人は、……、ウー、ウー、ウー。

声をあげて泣いている渡部さんを目の前にして、動くに動けなくなった。このように自分のために涙を流して下さる方がいて本当にありがたかった。しかし他方、信愛教会の内部事情が早くも近隣教会に知られている事実には驚かされていた。

「同志社大学グリークラブ宇和島演奏会」は、宇和島信愛教会創立100周年関連行事として企画された。しかし1988年度に選出された役員会の立場を考慮して、当初の計画を断念し新たに同志社大学グリークラブ宇和島実行委員会を立ち上げた。次の通りである。

代 表	清水敏幸
事 務 局	松村龍二
問 い 合 わ せ	大西正一
デザイン協力	都築穰一

●全国合唱コンクール連続優勝 ●世界合唱祭日本代表 ●アメリカ・ヨーロッパ演奏旅行 ●日本初の中国演奏旅行

同志社大学グリークラブ宇和島演奏会

特別出演 宇和島少年少女合唱団

●とき 8月2日(火) PM6:30~PM9:00
●ところ 南予文化会館大ホール

入場料 一般 1,500円 自由席
中学生以下 1,000円



美術協力 野村学園

主催 同志社大学グリークラブ宇和島公演実行委員会
副主催 同志社大学校友会宇和島支部

後援 宇和島市教育委員会・宇和島文化協会・野村町社会福祉協議会・宇和島音楽鑑賞会
NHK松山放送局・南海放送・テレビ愛媛・愛媛新聞社・夕刊つじま

お問い合わせ 大西正一 ☎22-1961

「同志社大学グリークラブ宇和島演奏会」

「ポスターには野村学園の版画を用いたい」という都築穰一さんの希望もあって、6月に車を連ねて野村学園を訪ねる。卯之町から29号線を東に進み、野村町の街並みの手前に野村ダム湖がある。野村学園はその湖畔にあった。学園に着くと、生徒たちと8カ月ぶりの再会を喜び合う。それから園を案内していただく一方で、都築さんは版画の借用と使用許可を得ていた。7月に入ると、野村学園の生徒の版画で作成されたポスターが宇和島の街のあらゆるところに張り出される。8月2日(火)午後6時半から行われた同志社大学グリークラブの宇和島演奏会も南予文化会館に満席の会衆で大盛会だった。

*

神戸女学院伝道キャラバン隊は7月15日(金)16日(土)と吉田教会に滞在し、15日午後4時から吉田教会で子ども向けの集会を開いた。7月26日(火)から早瀬和人夏期伝道師が吉田教会に滞在し、教会活動に参加した。南予分区の中高校生夏期キャンプは8月9日(火)から11日(木)まで三崎半島塩成で開かれる。8月25日(木)に薬師谷の白石さん宅で子ども会を、8月27日(土)には中高生のガーデン・パーティを吉

田教会で行った。平林智恵子さんが金沢元町教会から信愛教会に転入会したのは10月16日(日)である。

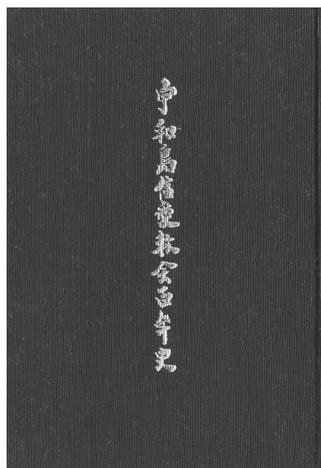
11月も中旬に入ったその日も訪問活動を終え、大西さんの店で休ませてもらっていた。しばらく雑談をしてから大西さんは真剣な面持ちで語りかけてきた¹¹⁾。

塩野先生は宇和島で実によくされた。しかし、このまま宇和島に留まっていたら、塩野先生は自分の可能性を芽生えさせることもなく終わってしまう。先生はこれまでにすべきことを十分にされた。だから、今は自分を守り、奥様を大切にしなければならぬ。そして、これからは神様が塩野先生に与えておられる可能性を芽生えさせ、花咲かせ、実らせなければならぬ。

大西さんの助言に深く納得できたので、11月21日(月)夜7時に臨時役員会を開いて年度末の辞任を申し出た。臨時総会は12月11日(日)に開かれ、辞任が決定する。

信愛教会の創立百周年記念礼拝を執行したのは11月13日(日)である。この日は礼拝に続き、午後2時から百周年記念式典を開き、来会者には『宇和島信愛教会100年史』を進呈した。思いがけない出来事が起こったのは、式典を終わり玄関で来会者に挨拶していた時である。役員や一部会員が顔を背けて会場を後にしていく中で、「この度は百周年の記念式典及び『百年史』の御出版、まことにおめでとうございます」と深々と頭を下げる人がいた。藤井三男さんである。なぜかその時込み上げてくるものがあり、私も藤井さんに深々と頭を下げた。感動の一瞬だった。

1989(昭和64)年に入って、身体の異変に気付いた。右手の甲の擦り傷が治らないうばかりか、深く広く広がっていく。体が弱って免疫力が低下し、傷を治す力がないに



『宇和島信愛教会100年史』

11) 参照、塩野和夫『キリストにある真実を求めて－出会い・教会・人間像－』34頁

違いない。そこで命を守るためストレスの多い信愛教会を後にして、妻と猫2匹を連れて吉田教会に転居した。2月12日(日)に土肥昭夫先生(同志社大学神学部)を招いた合同礼拝を午前10時半から吉田教会で行った。「冬の日を走り抜こうではないか」(ヘブル12章1-4節)の結びは次の通りである。

冬の日を走り抜こうではないか。長距離ランナーは孤独である。その孤独を励ますのが、観衆と先導する車である。私たちにとって観衆とは信仰の証人であり、先導してくださるのは主イエスである。一人の証人を紹介したい。中谷康子さんである。中谷さんは殉職した夫の遺骨が靖国神社に祭られるのに抗議し訴訟を起こした。1審2審と中谷さんは勝訴したが、3審で国に敗れた。けれども、中谷さんにはこやかに裁判所を出てきた。その時、こういう声が起こった。中谷さんはクリスチャンらしい。こういうのがキリスト教ならすごいのではないかと。一見、中谷さんの行動はキリスト教とは関係がないと思われる。しかし、背後にあって中谷さんを支えたのはキリスト教信仰であった。人々は中谷さんにキリスト教はすごいと思った。これが証しであろう。先立つイエスと証人に励まされて信仰の生活を送りたい。

信愛教会役員会の要望で信愛教会に帰ったのは3月に入ってからである。

3月19日(日)夜は招待を受けて、夫婦そろって広見町の清家さん宅で過ごした。まごころ共同野菜の生産者と夕食を共にしたが、彼らはいつの間にか30名を越えていた。「全員が集まって下さった」と聞く。どなたもいい顔をしていた。夜に2階へ上がっていくと、階段が傾いている。朝になってそのことを清家さんに聞くと、何気ない顔で「自分で建てた家だから」と返事が返ってきた。

3月20日(月)に宇和島と吉田を後にする。できるだけ減らした荷物は大西さんが小型トラックで運んでくださり、積みなかつた分は野菜仲間の宮本俊二さんに届けてもらった。